

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	学部の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン カンセイガクイン 学校法人 関西学院									
フリガナ大学の名称	カンセイガクインダイガク 関西学院大学 (Kwansei Gakuin University)									
大学本部の位置	兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号									
大学の目的	<p>関西学院大学はその理念とするキリスト教主義に基づき、教育基本法および学校教育法の規定するところに従い、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、キリスト教主義に基づいて人格を陶冶することを目的とする。</p> <p>本学初代学長（第4代院長）C. J. L. ベーツが提唱したスクールモットー“Mastery for Service（奉仕のための練達）”は、関西学院の建学の精神を簡潔に表現するものであり、「社会貢献のためにこそ実力を身につけよ」と解されている。本学は、知性を、そして自らが持つすべての豊かさを、隣人のために用いることを強調するとともに、創立当初から培われてきた国際性と社会貢献への使命感を身につけた世界市民の育成を重視する。</p> <p>本学は、教育においては、全人的教養および専門的知識・技能を修得させるとともに、広く創造力、課題発見能力、課題解決能力そして実行力を強化しつつ、応用研究および先端的研究を発展充実させるとともに、研究成果を社会に還元して、社会貢献することをめざす。</p>									
新設学部等の目的	<p>国際学部国際学科は、本学の建学の精神を背景に「キリスト教主義」に基づく人格の陶冶を行うことにより「人間性」を高め、「国際性」つまり本学がこれまでに培ってきた人文・社会科学分野の成果を踏まえて世界理解、国際理解をより深化させ、真の実力に満ちた「世界市民の育成」を目的とする。本学部では、「国際性の涵養」という教育・研究上の理念を達成するために、「国際事情に関する課題の理解と分析」を教育・研究上の目的とする。その目的の達成を通じて、「国際性」（世界理解、国際理解のための能力）と「人間性」を備えた世界市民として、国際的なビジネス・市民社会で活躍できる人材を養成する。</p>									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	国際学部 [School of International Studies] 国際学科 [Department of International Studies] 計	年	人	年次人	人	学士 (国際学)	年 月 第 年次	平成22年 4月1日 第1年次	兵庫県西宮市上ヶ原 一番町1番155号	
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）		大学全体の収容定員関係学則変更認可申請（平成21年3月31日付）。								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	国際学部国際学科	講義	演習	実習	計					
		274 科目	11 科目	0 科目	285 科目	124 単位				
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等						兼任教員	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	人	
			人	人	人	人	人	人	人	
	新設	国際学部	国際学科	18 (16)	7 (7)	3 (3)	— (—)	28 (26)	— (—)	46 (20)
			教養教育等	— (—)	— (—)	12 (12)	— (—)	12 (12)	— (—)	22 (15)
小計		18 (16)	7 (7)	15 (15)	— (—)	40 (38)	— (—)	68 (35)		

教 員 組 織 の 設 置 概 要	学 部 等 の 名 称		専任教員等					兼任 教員		
			教授	准教授	講師	助教	計		助手	
	既		人	人	人	人	人	人	人	
	関西学院大学		6	3	1	1	11	—	19	
	神学部		(6)	(3)	(1)	(1)	(11)	(—)	(19)	
	文学部	文化歴史学科	25	2	—	—	27	—	136	
		総合心理科学科	(25)	(2)	(—)	(—)	(27)	(—)	(136)	
		文学言語学科	11	2	—	—	13	—	42	
		総合心理科学科	(11)	(2)	(—)	(—)	(13)	(—)	(42)	
		文学言語学科	27	4	—	—	31	—	100	
		文学言語学科	(27)	(4)	(—)	(—)	(31)	(—)	(100)	
	社会学部	社会学科	28	8	1	6	43	—	93	
			社会学科	(33)	(8)	(1)	(6)	(48)	(—)	(93)
		教養教育等	—	—	—	—	0	—	76	
		教養教育等	(—)	(—)	(—)	(—)	(0)	(—)	(76)	
	法学部	法律学科	22	4	—	—	26	—	65	
			法律学科	(22)	(4)	(—)	(—)	(26)	(—)	(65)
		政治学科	9	—	2	—	11	—	41	
		政治学科	(10)	(—)	(2)	(—)	(12)	(—)	(41)	
		教養教育等	8	5	—	—	13	—	84	
		教養教育等	(8)	(5)	(—)	(—)	(13)	(—)	(84)	
	経済学部	専門教育	23	8	—	9	40	—	24	
			専門教育	(27)	(8)	(—)	(5)	(40)	(—)	(24)
		教養教育等	4	4	4	4	16	—	84	
		教養教育等	(5)	(4)	(4)	(3)	(16)	(—)	(84)	
	商学部	専門教育	24	6	—	—	30	—	42	
			専門教育	(28)	(6)	(—)	(—)	(34)	(—)	(42)
		教養教育等	2	8	—	—	10	—	83	
		教養教育等	(2)	(8)	(—)	(—)	(10)	(—)	(83)	
	理工学部	数理科学科	9	1	1	—	11	—	4	
			数理科学科	(8)	(1)	(1)	(—)	(10)	(—)	(3)
		物理学科	8	2	3	—	13	—	3	
			物理学科	(11)	(2)	(—)	(—)	(13)	(—)	(3)
		化学科	8	3	—	—	11	—	7	
			化学科	(9)	(3)	(—)	(—)	(12)	(—)	(6)
		生命科学科	10	1	1	—	12	—	7	
			生命科学専攻 生命医化学専攻	(10)	(1)	(1)	(—)	(12)	(—)	(7)
		情報科学科	8	2	—	—	10	—	8	
		情報科学科	(9)	(2)	(—)	(—)	(11)	(—)	(7)	
		人間システム工学科	8	2	1	—	11	—	11	
		人間システム工学科	(8)	(2)	(1)	(—)	(11)	(—)	(6)	
		教養教育等	1	2	7	—	10	—	14	
		教養教育等	(3)	(2)	(7)	(—)	(12)	(—)	(14)	
	総合政策学部	総合政策学科	20	4	—	—	24	—	96	
			総合政策学科	(20)	(4)	(—)	(—)	(24)	(—)	(96)
		メディア情報学科	6	4	1	—	11	—	96	
			メディア情報学科	(6)	(4)	(1)	(—)	(11)	(—)	(96)
		都市政策学科	8	2	—	—	10	—	72	
			都市政策学科	(11)	(1)	(—)	(—)	(12)	(—)	(50)
		国際政策学科	7	2	1	—	10	—	66	
		国際政策学科	(10)	(1)	(—)	(—)	(11)	(—)	(47)	
		教養教育等	—	—	11	—	11	—	26	
		教養教育等	(—)	(—)	(11)	(—)	(11)	(—)	(26)	
	人間福祉学部	社会福祉学科	5	7	1	2	15	—	33	
			社会福祉学科	(5)	(7)	(1)	(2)	(15)	(—)	(33)
		社会起業学科	5	3	1	—	9	—	28	
			社会起業学科	(5)	(3)	(1)	(—)	(9)	(—)	(29)
		人間科学科	6	6	—	—	12	—	9	
		人間科学科	(6)	(6)	(—)	(—)	(12)	(—)	(9)	
		教養教育等	1	2	2	—	5	5	30	
		教養教育等	(1)	(2)	(2)	(—)	(5)	(5)	(30)	

教 員 組 織 の 概 要	既 設	教育学部	幼児・初等教育学科	13 (15)	12 (12)	3 (3)	— (—)	28 (30)	— (—)	62 (62)
			臨床教育学科	4 (4)	2 (2)	— (—)	— (—)	6 (6)	— (—)	6 (3)
			教養教育等	5 (5)	— (—)	— (—)	— (—)	5 (5)	— (—)	26 (26)
		小計	321 (350)	111 (109)	41 (37)	22 (17)	495 (513)	5 (5)	1493 (1442)	
	情報メディア教育センター	— (—)	— (—)	1 (1)	— (—)	1 (1)	— (—)	19 (19)		
	言語教育研究センター	— (—)	1 (1)	16 (16)	— (—)	17 (17)	— (—)	30 (30)		
	教職教育研究センター	4 (4)	1 (1)	— (—)	— (—)	5 (5)	— (—)	34 (34)		
	キリスト教と文化研究センター	2 (2)	— (—)	— (—)	— (—)	2 (2)	— (—)	— (—)		
	スポーツ科学・健康科学教育プログラム室	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	0 (0)	— (—)	5 (5)		
	教務部	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	0 (0)	— (—)	124 (124)		
	国際教育プログラム室	— (—)	2 (2)	1 (1)	— (—)	3 (3)	— (—)	21 (21)		
	キャリア教育プログラム室	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	0 (0)	— (—)	4 (4)		
	災害復興制度研究所	1 (1)	— (—)	— (—)	— (—)	1 (1)	— (—)	— (—)		
	学長直属教員	3 (3)	— (—)	— (—)	— (—)	3 (3)	— (—)	— (—)		
	小計	10 (10)	4 (4)	18 (18)	0 (0)	32 (32)	0 (0)	237 (237)		
	合計	349 (376)	122 (120)	74 (70)	22 (17)	567 (583)	5 (5)	1798 (1714)		

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計		
	事 務 職 員		343 人 (342)	307 人 (307)	650 人 (649)		
	技 術 職 員		11 (11)	— (—)	11 (11)		
	図 書 館 専 門 職 員		29 (29)	14 (14)	43 (43)		
	そ の 他 の 職 員		8 (10)	14 (14)	22 (24)		
	計		391 (392)	335 (335)	726 (727)		
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	聖和短期大学と共用	
	校 舎 敷 地	239,785 m ²	23,457 m ²	— m ²	263,242 m ²		
	運 動 場 用 地	291,531 m ²	9,298 m ²	— m ²	300,829 m ²		
	小 計	531,316 m ²	32,755 m ²	0 m ²	564,071 m ²		
	そ の 他	37,948 m ²	4,600 m ²	— m ²	42,548 m ²		
	合 計	569,264 m ²	37,355 m ²	0 m ²	606,619 m ²		
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	聖和短期大学と共用	
		251,489 m ² (251,489 m ²)	24,565 m ² (24,565 m ²)	889 m ² (889 m ²)	276,943 m ² (276,943 m ²)		
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体	
	217 室	146 室	250 室	50 室 (補助職員 44人)	15 室 (補助職員 8人)		
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数		29室のうち1室は、言語教育科目担当の専任講師(12名)のための共同研究室	
		国際学部国際学科		29 室			
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点
	国際学部国際学科	222,835 〔87,344〕 (202,707 〔80,600〕)	13,340 〔6,378〕 (12,036 〔5,781〕)	32,893 〔30,634〕 (28,893 〔26,634〕)	26,925 (22,330)	40 (10)	0 (0)
	計	222,835 〔87,344〕 (202,707 〔80,600〕)	13,340 〔6,378〕 (12,036 〔5,781〕)	32,893 〔30,634〕 (28,893 〔26,634〕)	26,925 (22,330)	40 (10)	0 (0)
図書館		面積		閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数		大学全体
		22,953 m ²		2,236 席	1,900,000 冊		

体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						大学全体
		16,310 m ²		-		-				
経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	大学全体 図書購入費には 電子ジャーナル・データ ベースの整備費 (運用コスト含む) を含む。	
	教員1人当り研究費等		1,399千円	1,385千円	1,372千円	1,356千円				
	共同研究費等		243,044千円	243,878千円	243,878千円	244,102千円				
	図書購入費	671,748千円	715,672千円	704,912千円	693,512千円	674,195千円				
	設備購入費	1,153,162千円	312,644千円	309,246千円	309,339千円	309,381千円				
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		1,365千円	1,217千円	1,217千円	1,217千円					
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、寄付金収入、補助金収入、資産運用収入、資産売却収入を充当する。							

大学等の名称	関西学院大学							所在地		
	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開年度			
関西学院大学 神学部	4	30	—	120	学士（神学）	1.09	昭和27年	兵庫県西宮市 上ヶ原一番町 1番155号		
文学部						1.06		同上		
哲学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和23年	H15年度より学生募集停止 （文学部哲学 科、美学科、心理学科、教育学科、日本文学科、英文学科、フランス文学科、ドイツ文学科）		
美学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和27年			
心理学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和23年			
教育学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和23年			
史学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和26年			
日本文学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和23年			
英文学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和23年			
フランス文学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和38年			
ドイツ文学科	4	—	—	—	学士（文学）	—	昭和34年			
文化歴史学科	4	275	—	1,100	学士（文学）	1.05	平成15年			
総合心理科学科	4	175	—	700	学士（文学）	1.02	平成15年			
文学言語学科	4	320	—	1,280	学士（文学）	1.09	平成15年			
社会学部						1.11		同上	H20.4収容定員減 H20年度より学生募集停止（社会学部社会福祉学科） H21.4収容定員増	
社会学科	4	650	3年次	2,075	学士（社会学）	1.11	昭和35年			
社会福祉学科	4	—	10	—	学士（社会福祉学）	—	平成11年			
法学部						1.04		同上	H20.4収容定員増	
法律学科	4	520	—	2,060	学士（法学）	1.01	昭和23年			
政治学科	4	160	—	600	学士（法学）	1.14	昭和23年		H20.4収容定員増	
経済学部	4	680	—	2,660	学士（経済学）	1.05	昭和23年	同上	H20.4収容定員増	
商学部	4	650	—	2,600	学士（商学）	1.03	昭和26年	同上		
理工学部						1.13		兵庫県三田市 学園2丁目1番地	H21.4学科設置	
数理科学科	4	75	—	75	学士（理学）	1.34	平成21年			
物理学科	4	75	—	405	学士（理学）	1.20	昭和36年	H21.4収容定員減、専攻廃止 H21年度より学生募集停止 （物理学科物理学専攻、数学専攻）	H21.4収容定員増、専攻設置	
物理学専攻	4	—	—	—	学士（理学）	—				
数学専攻	4	—	—	—	学士（理学）	—				
化学科	4	75	—	300	学士（理学）	1.11	昭和36年			
生命科学科	4	—	—	150	学士（生命科学）	1.12	平成14年	H21.4収容定員増、専攻設置		
生命科学専攻	4	40	—	40	学士（生命科学）	—				
生命医化学専攻	4	40	—	40	学士（生命科学）	—				
情報科学科	4	75	—	450	学士（情報科学）	1.06	平成14年		H21.4収容定員減	
人間システム工学科	4	80	—	80	学士（工学）	1.22	平成21年		H21.4学科設置	
総合政策学部						1.08		同上	H21年度より学部一括募集を開始 H21.4収容定員減	
総合政策学科	4	240	3年次	35	1,420	学士（総合政策）	1.09			平成7年
メディア情報学科	4	120	—	480	学士（総合政策）	1.07	平成14年			
都市政策学科	4	100	—	100	学士（総合政策）	—	平成21年			
国際政策学科	4	120	3年次	15	120	学士（総合政策）	—	平成21年		H21.4学科設置

学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	取 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 年 度	設 度	所 在 地	
人間福祉学部										
社会福祉学科	4	130	—	260	学 士 (社 会 福 祉 学)	1.04 0.95	平成20年		兵庫県西宮市 上ヶ原一番町 1番155号	H20.4学部設置
社会起業学科	4	70	—	140	学 士 (社 会 起 業)	1.14	平成20年			
人間科学科	4	100	—	200	学 士 (人 間 科 学)	1.10	平成20年			
教育学部			3年次							
幼児・初等教育学科	4	280	5	280	学 士 (教 育 学)	0.92 0.92	平成21年		兵庫県西宮市 岡田山7番54号	H21.4学部設置
臨床教育学科	4	70	—	70	学 士 (教 育 学)	0.90	平成21年			
大 学 の 名 称	聖 和 大 学									
学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	取 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 年 度	設 度	所 在 地	
聖和大学 教育学部										
幼児教育学科	4	—	3年次 5	10	学 士 (教 育 学)	—	昭和39年		兵庫県西宮市 岡田山7番54号	H21.4設置者変更 H21年度より 第1年次の学生 募集停止(教育 学部幼児教育学 科)
人文学部										
キリスト教学科	4	—	—	—	学 士 (人 文 学)	—	平成7年		同上	H21年度より 学生募集停止 (人文学部キリ スト教学科、グ ローバル・コミュ ニケーション学 科)
グローバル・コミュニケーション学科	4	—	—	—	学 士 (人 文 学)	—	平成7年			
大 学 の 名 称	関 西 学 院 大 学 大 学 院									
学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 学 定 員	取 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 年 度	設 度	所 在 地	
関西学院大学大学院 博士課程 前期課程										
神学研究科 神学専攻	2	10	—	20	修 士 (神 学)	0.90	昭和27年		兵庫県西宮市 上ヶ原一番町 1番155号	
文学研究科										
哲学専攻	2	—	—	—	修 士 (哲 学)	—	昭和25年		同上	H19年度より 学生募集停止 (文学研究科哲 学専攻、美学専 攻、心理学専 攻、教育学専 攻、日本史学専 攻、西洋史学専 攻、日本文学専 攻、英文学専 攻、フランス文 学専攻、ドイツ 文学専攻)
美学専攻	2	—	—	—	修 士 (美 学)	—	昭和29年			
心理学専攻	2	—	—	—	修 士 (芸 術 学)	—	昭和25年			
教育学専攻	2	—	—	—	修 士 (心 理 学)	—	昭和25年			
					修 士 (教 育 心 理 学)	—	昭和27年			
					修 士 (学 校 教 育 学)	—				
日本史学専攻	2	—	—	—	修 士 (歴 史 学)	—	昭和36年			
西洋史学専攻	2	—	—	—	修 士 (歴 史 学)	—	昭和29年			
					修 士 (地 理 学)	—				
日本文学専攻	2	—	—	—	修 士 (文 学)	—	昭和26年			
					修 士 (言 語 学)	—				
英文学専攻	2	—	—	—	修 士 (文 学)	—	昭和25年			
					修 士 (言 語 学)	—				
フランス文学専攻	2	—	—	—	修 士 (文 学)	—	昭和42年			
					修 士 (言 語 学)	—				
ドイツ文学専攻	2	—	—	—	修 士 (文 学)	—	昭和38年			
					修 士 (言 語 学)	—				
文化歴史学専攻	2	22	—	44	修 士 (哲 学)	1.02	平成19年			
					修 士 (美 学)	—				
					修 士 (芸 術 学)	—				
					修 士 (歴 史 学)	—				
					修 士 (地 理 学)	—				
総合心理科学専攻	2	20	—	40	修 士 (心 理 学)	0.92	平成19年			
					修 士 (教 育 心 理 学)	—				
					修 士 (教 育 学)	—				
					修 士 (学 校 教 育 学)	—				
文学言語学専攻	2	22	—	44	修 士 (文 学)	0.61	平成19年			
					修 士 (言 語 学)	—				
社会学研究科 社会学専攻	2	12	—	24	修 士 (社 会 学)	0.70	昭和36年		同上	
法学研究科 法学・政治学専攻	2	45	—	90	修 士 (法 学)	0.29	平成16年		同上	
経済学研究科 経済学専攻	2	30	—	60	修 士 (経 済 学)	0.53	昭和25年		同上	

学 部 等 の 名 称	修 業 年 限	入 学 定 員	編 入 定 員	取 容 定 員	学 位 又 は 称 号	定 員 超 過 率	開 年 度	設 度	所 在 地	
商学研究科 商学専攻	2	30	—	60	修士（商学） 修士（経営学） 修士（会計学） 修士（マーケティング） 修士（ファイナンス） 修士（ビジネス情報） 修士（国際ビジネス）	0.78	昭和28年		兵庫県西宮市 上ヶ原一番町 1番155号	
理工学研究科 数理学専攻 (修士課程)	2	10	—	10	修士（理学）	0.20	平成21年		兵庫県三田市 学園2丁目1番 地	H21.4専攻設置
物理学専攻	2	25	—	50	修士（理学） 修士（工学） 修士（国際自然科学）	0.96	昭和40年			
化学専攻	2	33	—	66	修士（理学） 修士（工学） 修士（国際自然科学）	0.75	昭和40年			
生命科学専攻	2	20	—	40	修士（理学） 修士（工学） 修士（国際自然科学）	1.17	平成16年			
情報科学専攻	2	45	—	90	修士（理学） 修士（工学）	1.04	平成18年			
総合政策研究科 総合政策専攻	2	50	—	100	修士（総合政策） 修士（メディア情報） 修士（国際開発戦略）	0.29	平成11年		同上	
言語コミュニケーション文化研究科 言語コミュニケーション文化専攻	2	30	—	60	修士（言語科学） 修士（言語文化学） 修士（言語教育学） 修士（日本語教育学）	0.76	平成13年		兵庫県西宮市 上ヶ原一番町 1番155号	
人間福祉研究科 人間福祉専攻	2	8	—	16	修士（人間福祉）	1.00	平成20年		同上	H20.4研究科設置 1・2年次同時開設
教育学研究科 教育学専攻	2	6	—	12	修士（教育学）	0.50	平成21年		兵庫県西宮市 岡田山7番54号	H21.4研究科設置 1・2年次同時開設
既設 大学等 の 状 況		年	人	年次人	人		倍			
関西学院大学大学院 博士課程 後期課程									兵庫県西宮市 上ヶ原一番町 1番155号	
神学研究科 神学専攻	3	2	—	6	博士（神学）	1.00	昭和29年			
文学研究科 哲学専攻	3	—	—	—	博士（哲学）	—	昭和29年		同上	H19年度より 学生募集停止 (文学研究科哲 学専攻、美学専 攻、心理学専 攻、教育学専 攻、日本史学専 攻、西洋史学専 攻、日本文学専 攻、英文学専 攻、フランス文 学専攻、ドイツ 文学専攻)
美学専攻	3	—	—	—	博士（美学）	—	昭和36年			
心理学専攻	3	—	—	—	博士（心理学）	—	昭和29年			
教育学専攻	3	—	—	—	博士（教育学） 博士（教育心理学）	—	昭和36年			
日本史学専攻	3	—	—	—	博士（歴史学）	—	昭和38年			
西洋史学専攻	3	—	—	—	博士（歴史学） 博士（地理学）	—	昭和31年			
日本文学専攻	3	—	—	—	博士（文学） 博士（言語学）	—	昭和29年			
英文学専攻	3	—	—	—	博士（文学） 博士（言語学）	—	昭和29年			
フランス文学専攻	3	—	—	—	博士（文学） 博士（言語学）	—	昭和42年			
ドイツ文学専攻	3	—	—	—	博士（文学） 博士（言語学）	—	昭和38年			
文化歴史学専攻	3	7	—	21	博士（哲学） 博士（美学） 博士（芸術学） 博士（歴史学） 博士（地理学）	0.95	平成19年			
総合心理科学専攻	3	6	—	18	博士（心理学） 博士（教育心理学） 博士（教育学）	0.77	平成19年			
文学言語学専攻	3	7	—	21	博士（文学） 博士（言語学）	0.95	平成19年			
社会学研究科 社会学専攻	3	4	—	12	博士（社会学）	0.91	昭和36年		同上	

教育課程等の概要																
(国際学部 国際学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
キリスト教科目	キリスト教学A	1 春		2		○			1							
	キリスト教学B	1 秋		2		○			1							
	Christianity A	1 春		2		○				1						
	Christianity B	1 秋		2		○				1						
	小計(4科目)	—		0	8	0	—		1	1	0	0	0	兼0	—	
言語教育科目	第1外国語初級	English I	1 春		4		○			1					兼7	※2
		English II	1 秋		4		○			1					兼7	※2
		English III	2 春		4		○								兼7	※2
		English IV	2 秋		4		○								兼7	※2
		Chinese I	1 春		4		○								兼2	※2
		Chinese II	1 秋		4		○								兼2	※2
		Chinese III	2 春		4		○								兼2	※2
		Chinese IV	2 秋		4		○								兼2	※2
		Korean I	1 春		4		○					1			兼2	※2
		Korean II	1 秋		4		○					1			兼2	※2
		Korean III	2 春		4		○								兼2	※2
		Korean IV	2 秋		4		○								兼2	※2
		Japanese I	1 春		4		○								兼4	※2
		Japanese II	1 秋		4		○								兼4	※2
	Japanese III	2 春		4		○								兼4	※2	
	Japanese IV	2 秋		4		○								兼4	※2	
	第1外国語中級	English V (L S)	3 春		2		○								兼4	
		English VI (L S)	3 秋		2		○								兼4	
		English V (RW)	3 春		2		○								兼3	
		English VI (RW)	3 秋		2		○								兼3	
Chinese V (L S)		3 春		2		○								兼2	※2	
Chinese VI (L S)		3 秋		2		○								兼2	※2	
Chinese V (RW)		3 春		2		○								兼2	※2	
Chinese VI (RW)		3 秋		2		○								兼2	※2	
Korean V (L S)		3 春		2		○								兼1		
Korean VI (L S)		3 秋		2		○								兼1		
Korean V (RW)		3 春		2		○								兼1		
Korean VI (RW)		3 秋		2		○								兼1		
Japanese V (L S)		3 春		2		○								兼2	※2	
Japanese VI (L S)		3 秋		2		○								兼2	※2	
Japanese V (RW)	3 春		2		○								兼2	※2		
Japanese VI (RW)	3 秋		2		○								兼2	※2		
第1外国語上級	English VII (Presentation)	4 春		2		○								兼2		
	English VIII (Presentation)	4 秋		2		○								兼2		
	Chinese VII (Presentation)	4 春		2		○								兼1		
	Chinese VIII (Presentation)	4 秋		2		○								兼1		
	Korean VII (Presentation)	4 春		2		○					1			兼1	※2	
	Korean VIII (Presentation)	4 秋		2		○					1			兼1	※2	
	Japanese VII (Presentation)	4 春		2		○								兼1		
	Japanese VIII (Presentation)	4 秋		2		○								兼1		

※2は、共同担当。

備考欄の兼担・兼任数には、以下のとおり国際学部教養教育等の専任教員(12名)が含まれている。

【第1外国語初級】

English I の兼7名、English II の兼7名、English III の兼7名中6名、English IV の兼7名中6名、Chinese I の兼2名、Chinese II の兼2名、Chinese III の兼2名、Chinese IV の兼2名、Japanese I の兼4名中2名、Japanese II の兼4名中2名、Japanese III の兼4名中2名、Japanese IV の兼4名中2名。

【第1外国語中級】

English V (L S) の兼4名、English VI (L S) の兼4名、English V (RW) の兼3名、English VI (RW) の兼3名、Chinese V (L S) の兼2名、Chinese VI (L S) の兼2名、Japanese V (L S) の兼2名、Japanese VI (L S) の兼2名、Japanese V (RW) の兼2名、Japanese VI (RW) の兼2名。

【第1外国語上級】

English VII (Presentation) の兼2名、English VIII (Presentation) の兼2名、Japanese VII (Presentation) の兼1名、Japanese VIII (Presentation) の兼1名。

教育課程等の概要															
(国際学部 国際学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
言語教育科目	英語Ⅰ	1春		2		○								兼1	
	英語Ⅱ	1秋		2		○								兼1	
	中国語Ⅰ	1春		2		○								兼5	※2
	中国語Ⅱ	1秋		2		○								兼5	※2
	朝鮮語Ⅰ	1春		2		○								兼2	※2
	朝鮮語Ⅱ	1秋		2		○								兼2	※2
	ドイツ語Ⅰ	1春		2		○			1					兼1	※2
	ドイツ語Ⅱ	1秋		2		○			1					兼1	※2
	フランス語Ⅰ	1春		2		○								兼2	※2
	フランス語Ⅱ	1秋		2		○								兼2	※2
	スペイン語Ⅰ	1春		2		○								兼2	※2
	スペイン語Ⅱ	1秋		2		○								兼2	※2
	英語Ⅲ	2春		2		○								兼1	
	英語Ⅳ	2秋		2		○								兼1	
	中国語Ⅲ	2春		2		○								兼4	※2
	中国語Ⅳ	2秋		2		○								兼4	※2
	朝鮮語Ⅲ	2春		2		○								兼2	※2
	朝鮮語Ⅳ	2秋		2		○								兼2	※2
	ドイツ語Ⅲ	2春		2		○				1				兼1	※2
	ドイツ語Ⅳ	2秋		2		○				1				兼1	※2
フランス語Ⅲ	2春		2		○								兼2	※2	
フランス語Ⅳ	2秋		2		○								兼2	※2	
スペイン語Ⅲ	2春		2		○								兼2	※2	
スペイン語Ⅳ	2秋		2		○								兼2	※2	
小計(64科目)	—		0	160	0	—			2	1	1	0	0	兼35	—
留学科目	英語短期留学TRT	2休		3		○			1						
	英語短期留学QUE	2休		3		○			1						
	英語短期留学OXF	2休		3		○			1						
	英語短期留学STL	2休		3		○					1				
	英語短期留学NSW	2休		4		○			1						
	英語中期留学MTA	2春・秋		13		○			1	1					
	英語中期留学TRT	2春・秋		12		○			1	1					
	英語中期留学QUE	2秋		12		○			1						
	英語中期留学STL	2春		12		○					1				
	中国語短期留学	2休		3		○					1				
	中国語中期留学	2春		16		○			1						
	朝鮮語短期留学	2休		3		○			1						
	朝鮮語中期留学	2春		16		○					1				
小計(13科目)	—		0	103	0	—			9	4	2	0	0	兼0	—

※2は、共同担当。

教育課程等の概要														
(国際学部 国際学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
国際専攻科目	キリスト教と世界	2春		2		○				1				
	グローバル化と文化	2春		2		○			1					
	表象文化論	2秋		2		○			1					兼1
	文化越境論	2春		2		○								兼1
	多文化共生論	2秋		2		○								
	グローバル化と言語	2春		2		○			1					
	バイリンガリズム	2秋		2		○			1					
	異文化間コミュニケーション論	2春		2		○					1			
	Religions in Japan	2春		2		○			1					
	Intercultural Understanding	2春		2		○					1			
	Contemporary Multicultural Societies	2秋		2		○								兼1
	Modern Japanese Novels in English Translation	1春		2		○								兼1
	Japanese Poetry	1春		2		○								兼1
	Japanese Art A	1秋		2		○								兼1
	Japanese Art B	1春		2		○								兼1
	Traditional Japanese Theatre	1秋		2		○								兼1
	Japanese Cinema	1春		2		○								兼1
	The Geography of Japan A	1秋		2		○								兼1
	The Geography of Japan B	1春		2		○								兼1
	Japanese Psychology	1春		2		○								兼1
	Japanese History A	1秋		2		○								兼1
	Japanese History B	1春		2		○								兼1
	Religious and Traditional Rites	1秋		2		○								兼1
	日本の政治と外交	2春		2		○				1				隔年開講
	日本国憲法	2秋		2		○								兼1
	現代国際法	2秋		2		○				1				隔年開講
	国際政治経済論	2春		2		○				1				
	国際制度論	2秋		2		○				1				隔年開講
	グローバル・ガバナンス論	2秋		2		○				1				隔年開講
	ヨーロッパ国際関係史	2春		2		○								兼1 隔年開講
	国際ガバナンス事情	2春		2		○								兼1 隔年開講
	国際ジャーナリズム論	2秋		2		○								兼1
	北米とアジアの地理	2春		2		○					1			隔年開講
	比較対外関係論	2春		2		○				1				
	Global Governance	2春		2		○								兼1 隔年開講
	International Relations in Europe	2春		2		○								兼1 隔年開講
	Japanese Society	1春		2		○								兼1
	Special Topics in Japanese Society	1秋		2		○					1			
	Government and Politics in Japan	1秋		2		○								兼1
	Japanese Legal System	1春		2		○								兼1
	Japan's Foreign Relations	1春		2		○								兼1
	Political Economy of Japan	1秋		2		○								兼1
	国際企業経営論	2春		2		○					1			
	統計学	2秋		2		○								兼1
	経済学A	2春		2		○				1				
経済学B	2秋		2		○				1					
経営学A	2春		2		○				1					
経営学B	2秋		2		○				1					
国際会計論	2春		2		○				1					
財務報告および企業分析	2秋		2		○				1					
国際マーケティング論	2春		4		○								兼1 隔年開講	
国際移民論	2春		2		○					1				
環境経済学	2春		2		○								兼1	
経営人類学	2春		2		○								兼1	

教育課程等の概要															
(国際学部 国際学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
国際 専門 科目	中国思想文化論	2・3 春		2		○								兼1	
	アジアメディア文化論	2・3 秋		2		○								兼1	
	アジア言語文化論A	2・3 春		2		○			1						
	アジア言語文化論B	2・3 秋		2		○					1				
	日韓言語文化比較論	2・3 春		2		○					1				
	対人関係とアジア言語表現比較論	2・3 秋		2		○									兼1
	アジアの女性とジェンダー	2・3 春		2		○									兼1
	言語習得と日本語教育	2・3 秋		2		○									兼1
	日本語学と日本語教育	2・3 春		2		○			1						
	東アジアの宗教と国家	2・3 秋		2		○			1						
	Religion and State in East Asia	2・3 春		2		○			1						
	Cultures in Australia	2・3 秋		2		○					1				
	Religions in China	2・3 秋		2		○			1						
	Traditional Japanese Arts	1・2 秋		2		○									兼1
	Japanese Outlaws	1・2 秋		2		○									兼1
	Introduction to Japanese Literature	1・2 秋		2		○									兼1
	Introduction to Japanese Culture	1・2 春		2		○									兼1
	Contemporary Korean Studies B	1・2 春		2		○				1					
	アジア社会論	2・3 春		2		○									兼1
	韓国の政治と外交	2・3 秋		2		○			1						隔年開講
	朝鮮半島論	2・3 春		2		○			1						
	中国の政治と外交	2・3 秋		2		○			1						隔年開講
	アジアの国際関係	2・3 秋		2		○			1						隔年開講
	アジアの法	2・3 秋		2		○									兼1
	現代中国史	2・3 春		2		○			1						
	ASEAN現代史	2・3 春		2		○									兼1
	オセアニアの政治と外交	2・3 秋		2		○				1					隔年開講
	International Relations in ASEAN	2・3 秋		2		○				1					隔年開講
	Asia-Pacific Relations	2・3 休		2		○									兼1 集中
	Prewar US-Japan Relations	1・2 秋		2		○									兼1
	Prewar Japanese Political History	1・2 秋		2		○									兼1 隔年開講
	Postwar Japanese Political History	1・2 春		2		○									兼1
	Postwar Japanese Diplomatic History	1・2 秋		2		○									兼1
	Contemporary Korean Studies A	1・2 秋		2		○				1					
	アジア経済論A	2・3 春		2		○			1						
	アジア経済論B	2・3 秋		2		○			1						
	中国経済論	2・3 春		2		○			1						
	韓国経済論	2・3 春		2		○									兼1
	中国企業経営	2・3 秋		2		○				1					
	アジア会計論	2・3 春		2		○				1					
	East Asian Economies	2・3 春		2		○			1						
	Chinese Economy	2・3 秋		2		○			1						
	Management in Japan	2・3 春		2		○									兼1
	Japanese Financial Practices	2・3 秋		2		○									兼1
	Japanese Corporate Governance	2・3 春		2		○									兼1
	East Asian Finance	1・2 秋		2		○									兼1
小計 (46科目)		—	0	92	0			—	6	3	2	0	0	兼16	—

教 育 課 程 等 の 概 要														
(国際学部 国際学科)														
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
国際 専門 科目	研究演習 I	3 通	4				○		17	5	3			
	研究演習 II	4 通	4				○		17	5	3			
	Research Seminar I	3 通	4				○		1	1				
	Research Seminar II	4 通	4				○		1	1				
	卒業論文	4 通	4				○		17	5	3			
	Graduation Thesis	4 通	4				○		1	1				
	小計 (6科目)	—	24	0	0		—		18	6	3	0	0	兼0 —
領 域 関 連 科 目	英語学概論	1 秋		2			○							兼2 ※2
	英語音声学	1 春		2			○							兼1
	統語論	2 春		2			○							兼1
	意味論・語用論	2 春		2			○							兼1
	英語史	2 春		2			○							兼1
	音韻論・形態論	2 秋		2			○							兼1
	英米文学研究法	2 秋		2			○							兼1
	イギリス文学史A	2 春		2			○							兼1
	イギリス文学史B	2 秋		2			○							兼1
	アメリカ文学史A	2 春		2			○							兼1
	アメリカ文学史B	2 秋		2			○							兼1
	実践英語学特殊講義	3 春・秋		2			○							兼2
	イギリス文学特殊講義	3 春・秋		2			○							兼2
	アメリカ文学特殊講義	3 春・秋		2			○							兼2
	小計 (14科目)	—	0	28	0		—		0	0	0	0	0	兼12 —
合計 (285科目)		—	24	669	0		—		18	7	3	0	0	兼103 —
学位又は称号		学士 (国際学)			学位又は学科の分野			文学関係、法学関係、経済学関係						

※2は、共同担当。

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際学部国際学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
キリスト教科目	キリスト教学A	関西学院はキリスト教の精神にもとづいた教育研究を目的としているが、この授業では、「キリスト教学B」とあわせて、キリスト教に関する基礎的知識を修得し、その理解を深めることを目的とする。とくにキリスト教の聖典である聖書に語られた世界観・人間観・歴史観について学び、これらが問いかける人間存在の根本的課題を検討する。また、キリスト教は今日まで世界に広く影響力を有した。その歴史的表現について講じ、キリスト教文化を理解するための手がかりを与える。		
	キリスト教学B	関西学院はキリスト教の精神にもとづいた教育研究を目的としているが、この授業では、「キリスト教学A」とあわせて、キリスト教に関する基礎的知識を修得し、その理解を深めることを目的とする。とくにグローバル化しつつある現代において、私たちが直面する諸問題、自然環境・いのち・社会・世界平和等についてキリスト教の視点から考察する。さらに近代化のプロセスをへて、日本の社会がキリスト教から、きわめて重要な面で影響を受けていることを学ぶ。		
	Christianity A	本講義はキリスト教についての知識や出会いがほとんどなかったという学生を対象にしたキリスト教概論である。授業形態は講義を中心に、しかし学生の発表やディスカッションなども取り入れ、キリスト教についての知識と理解を深める機会を提供する。扱うテーマは、主にキリスト教の歴史的形成過程の概観、聖書の成立過程とコンテクスト的聖書の読み方、そしてキリスト教の特質などを学びながら、その影響や意味を考える。また、キリスト教を含む宗教というものを文化との関連という側面からも考察していく。	授業は英語で行う。	
	Christianity B	本講義はイエスキリストの生涯を概観し、その時代をイエスと共に生きた人々、特に女性たちや周辺化された人々に焦点を当て、その生涯(生き方)の痕跡をたどる。授業方法は各学生あるいはグループとして、様々な文学や学術書において描かれているいくつかのイエス像を発表させ、それらを題材にして、その生き方が語るメッセージを拾いディスカッションする。議論の基本的枠組みは、それぞれのイエス像を通して語られる生き様が現代に生きる私たちにとってどのような意味を持つのかを模索するものとなる。そして、人生について、生きる意味について、ひいてはそれぞれの人生観・世界観についてなども考え、議論していく。	授業は英語で行う。	
言語教育科目	第1外国語初級	English I	週に4回開講されるこの授業では、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の基礎的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員および英語ネイティブ教員であり、前者は精読を中心としたリーディング、後者は多読・速読等を中心としたリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの授業を担当する。普通教室と同時にPC教室を使用し、マルチメディアを駆使した語学教育を行う。 (長谷尚弥 専任教授) (釣井千恵 専任講師) (山科美和子 専任講師) (ハーバート久代 専任講師) (Laura Copeland 専任講師) (John Holthouse 専任講師) (Kevin Ballou 専任講師) (James D. Llewelyn 専任講師)	共同担当 週4回の授業を1クラスあたり2~3名で行う。日本人教員がリーディング、英語ネイティブ教員がリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングを分担して一人当たり週1~3回の授業を行う。
		English II	週に4回開講されるこの授業では、「English I」に引き続き、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の基礎的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員および英語ネイティブ教員であり、前者は精読を中心としたリーディング、後者は多読・速読等を中心としたリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの授業を担当する。普通教室と同時にPC教室を使用し、マルチメディアを駆使した語学教育を行う。 (長谷尚弥 専任教授) (釣井千恵 専任講師) (山科美和子 専任講師) (ハーバート久代 専任講師) (Laura Copeland 専任講師) (John Holthouse 専任講師) (Kevin Ballou 専任講師) (James D. Llewelyn 専任講師)	共同担当 週4回の授業を1クラスあたり2~3名で行う。日本人教員がリーディング、英語ネイティブ教員がリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングを分担して一人当たり週1~3回の授業を行う。
		English III	週に4回開講されるこの授業では、「English II」に引き続き、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の発展的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員および英語ネイティブ教員であり、前者は精読を中心としたリーディング、後者は多読・速読等を中心としたリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの授業を担当する。普通教室と同時にPC教室を使用し、マルチメディアを駆使した語学教育を行う。 (釣井千恵 専任講師) (中西弘 兼任講師) (山科美和子 専任講師) (ハーバート久代 専任講師) (James D. Llewelyn 専任講師) (David Svoboda 専任講師) (Laura Copeland 専任講師)	共同担当 週4回の授業を1クラスあたり2~3名で行う。日本人教員がリーディング、英語ネイティブ教員がリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングを分担して一人当たり週1~3回の授業を行う。

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目 第1外国語初級	English IV	週に4回開講されるこの授業では、「English III」に引き続き、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の発展的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員および英語ネイティブ教員であり、前者は精読を中心としたリーディング、後者は多読・速読等を中心としたリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの授業を担当する。普通教室と同時にPC教室を使用し、マルチメディアを駆使した語学教育を行う。 (釣井千恵 専任講師) (中西弘 兼任講師) (山科美和子 専任講師) (ハーバート久代 専任講師) (James D. Llwyn 専任講師) (David Svoboda 専任講師) (Laura Copeland 専任講師)	共同担当 週4回の授業を1クラスあたり2～3名で行う。日本人教員がリーディング、英語ネイティブ教員がリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングを分担して一人当たり週1～3回の授業を行う。
	Chinese I	目標は二つある。一つは、中国語の発音を徹底的に習得させ、中国語母語話者とはほぼ同じような発音ができること、もう一つは、中国語における最も基本的な表現である、判断文、存在所有文、形容詞述語文、動詞述語文や時間表現の基本を習得し、それをベースに簡単な「聞く・話す・読む・書く」ことができるようにすることである。中国語は、道具として位置づけ、理論的説明を中心とせず、教員はコーチの役割を果たし、四技能の訓練を繰り返すことにより、目標が達成されることを目指す。 (田禾 専任講師) (王松 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
	Chinese II	四技能の訓練を中心に、より複雑な中国語の時間表現や可能表現、希望表現、比較表現、把構文、受身文、使役文、複雑述語(結果補語、方向補語、様態補語、可能補語、数量補語、前置詞フレーズ補語)などを用いる表現の基本を習得し、視覚教材も併用しながら日常生活や対人的コミュニケーションに最も必要とされる中国語表現の基礎を習得することを目標とする。いろいろなコミュニケーションの場面を想定しながら、試行錯誤のうちに、情報の伝達や気持ちの表出がほぼできるように、道具としての中国語を自分の手で形成していく。 (田禾 専任講師) (王松 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
	Chinese III	四技能を中心に、複雑述語(結果補語、方向補語、様態補語、可能補語、数量補語、前置詞フレーズ補語)を用いる表現を徹底的に習得し、視覚教材も併用しながら日常生活や対人的コミュニケーションに必要とされるより高度な中国語の表現を習得することを目標とする。いろいろなコミュニケーションの場面を想定しながら、試行錯誤のうちに、ほぼ正確に情報の記録や伝達、話し手の気持ちの表出ができるように、道具としての中国語を自分の手で形成していく。 (田禾 専任講師) (王松 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
	Chinese IV	四技能を中心に、複雑な表現を駆使しながら、より正確に情報の記録や伝達、話し手の気持ちの表出ができるように、日常生活や対人的コミュニケーションに必要とされる高度な中国語の表現を習得することを目標とする。「聞く・話す・読む・書く」といった四技能の基本を身につけ、実際に中国に行っても基本的なコミュニケーションが取れるように、また、検定試験なら、中国語検定試験2級またはHSK4級のレベルに達し、使える中国語の習得を目指す。 (田禾 専任講師) (王松 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
	Korean I	Koreanの初級クラス。まったく初めて、という学生を対象に、Koreanとはどのような言語か、基礎から学んでいき、Koreanによるコミュニケーション能力を身につけるための土台作りを目的とする。日本語と大変似ているKoreanであるが、「入口」に当たる文字と発音の部分ではかなり大きな違いがあるため、その違いを丁寧にカバーしながら授業を行う。文字や発音から始め、基本的な語彙と文法を学習し、簡単な日常会話を学ぶ中で、韓国や朝鮮半島に関する知識も紹介していく。 (柳圭相 兼任講師) (芦田麻樹子 兼任講師) (尹盛熙 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名あるいは3名で担当し、一人当たり週1回あるいは2回の授業を行う。
	Korean II	「Korean I」に引き続き、Koreanの語彙と文法の知識を深め、会話能力を強化する。初級レベルより複雑な考え・感情を表現できるよう、様々なKoreanの文型を学ぶことにより、表現のバリエーションを増やし、適切な語彙と言い回しを使うための基礎を固める。それと併せて、韓国の歴史や政治、経済、社会現象、習慣、流行、芸能やスポーツなど、言葉以外の文化面にも触れ、語学を通して韓国・朝鮮半島に対する理解をさらに深める。 (柳圭相 兼任講師) (芦田麻樹子 兼任講師) (尹盛熙 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名あるいは3名で担当し、一人当たり週1回あるいは2回の授業を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目 第1外国語初級	KoreanⅢ	Koreanの中上級クラス。「KoreanⅠ」「KoreanⅡ」での学習内容を基に、本格的なコミュニケーション能力の向上を目的とする。教科書のみならず、実際の新聞記事や文学作品、ニュースやドラマなど、活きたKoreanのテキストにも触れる経験を通して、語彙や文法に加え、コミュニケーションに不可欠な背景知識の方も強化していく。受講者には、「聞く・話す・読む・書く」という4つの領域でバランスの取れた運用能力を目指し、授業での活動には積極的に参加してもらう。 (金世徳 兼任講師) (芦田麻樹子 兼任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週2回の授業を行う。
	KoreanⅣ	「KoreanⅢ」に引き続き、コミュニケーション能力の強化に向け、語彙や文法などの言語的知識と、文化や社会などの言語外知識を総合的に学習していく。日常生活の場面で、身近な話題に関して議論したり、問題を解決したり、特定のテーマに関して自分の意見をまとめられるようなレベルを目指す。受講者の積極的な参加を前提に、「聞く・話す・読む・書く」という4つの領域でバランスの取れた運用が可能となるよう、教科書やその他の資料を使って授業を行う。 (金世徳 兼任講師) (芦田麻樹子 兼任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週2回の授業を行う。
	JapaneseⅠ	アカデミック・リテラシーに必要な日本語の語彙、表現の基礎を学び、日本人学生と同程度にそれをこなしていける日本語能力の習得を目指す。文章を正確に読み解く。論説文や新聞記事などを簡潔、的確に要約し、批評する。論説文でよく用いられる抽象的な語の正確な理解と語彙力の増進を図る。また、相手が知らない内容を正確に分かりやすく伝えたり、視聴覚教材で取り上げた内容の趣旨を把握し、それをわかりやすく伝えたりするなどして、読解力だけでなく、コミュニケーション能力やスピーチ能力も育てる。 (竹口智之 専任講師) (野村登美子 兼任講師) (蔭山拓 兼任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
	JapaneseⅡ	アカデミック・リテラシーに必要な日本語の語彙、表現の基礎を学び、大学におけるアカデミックな活動において、日本人学生と同程度にそれをこなしていける日本語能力の習得を目指す。「読む・書く・話す・聞く」の四技能を総合的に伸ばすことを目標とする。レポートを書く手順と、そのために必要な表現について学ぶ。与えられたテーマについて、資料を基にレポートを書く。また、視聴覚教材やあるテーマについての新聞記事などの趣旨を把握し、それについての意見を述べる。レジュメを作成し、プレゼンテーションを行う。 (竹口智之 専任講師) (野村登美子 兼任講師) (蔭山拓 兼任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
	JapaneseⅢ	大学におけるアカデミックな活動に日本人学生と同等に参加できるレベルの日本語能力(「読む・書く・話す・聞く」の四技能)を総合的に伸ばし習得するとともに、日本語で論理的に自分の意見を述べたり、批評したりする力を養うことを目的とする。長い文章(新書一冊など)を読み、内容を簡潔、的確に要約する。内容に対する自分の意見や批評を明確に伝える文章を書く。担当箇所を正確に読み解き、レジュメを作成し分かりやすくプレゼンテーションを行う。また、あるテーマについてグループで議論したりディベートをしたりする。 (竹口智之 専任講師) (野村登美子 兼任講師) (蔭山拓 兼任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。
JapaneseⅣ	各自で論文のテーマを設定し、小論文作成とプレゼンテーションを行うことで、論理的に述べることでできる文章力とプレゼンテーション力を習得する。テーマにあった情報の収集、論理的な構成、論文作成に必要な語句、表現の習得を目標とする。小論文の構想を立て、文献調査やアンケート調査を行い、その調査結果を小論文としてまとめる。説得力のある論理的な小論文にするため、客観的に自分の論文を評価し読み手の視点から文章が書けるよう、読み手から得たコメントを自分の小論文に反映させ、完成させる。 (竹口智之 専任講師) (野村登美子 兼任講師) (蔭山拓 兼任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週4回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」と「読む・書く」を分担して一人当たり週2回の授業を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目 第1外国語中級	English V (LS)	週に2回開講されるこの授業では、「English I」-「EnglishIV」で培われた四技能にわたる英語の総合的能力を土台に、リスニングとスピーキングの分野に特化したさらに上級の英語能力の育成を目指す。原則として英語ネイティブ教員が担当し、スピーチやディスカッション、ディベート等の上級オーラルコミュニケーション能力の習得を目指す。可能な限りPC教室の機器やAV機器を駆使することで、実践的な場面を想定した英語力の習得を目指す。	
	EnglishVI (LS)	週に2回開講されるこの授業では、「English V(LS)」に引き続き、「English I」-「EnglishIV」で培われた四技能にわたる英語の総合的能力を土台に、リスニングとスピーキングの分野に特化したさらに上級の英語能力の育成を目指す。原則として英語ネイティブ教員が担当し、スピーチやディスカッション、ディベート等の上級オーラルコミュニケーション能力の習得を目指す。可能な限りPC教室の機器やAV機器を駆使することで、実践的な場面を想定した英語力の習得を目指す。	
	English V (RW)	週に2回開講されるこの授業では、「English I」-「EnglishIV」で培われた四技能にわたる英語の総合的能力を土台に、リーディングとライティングの分野に特化したさらに上級の英語能力の育成を目指す。原則として日本人教員が担当し、精読、多読、速読など、目的に応じた様々なリーディングのためのスキルやストラテジー、レポートや論文を書くための実践的なライティング力の習得を目指す。授業は、講義や発表、レポート作成等、様々な形式で行われる。	
	EnglishVI (RW)	週に2回開講されるこの授業では、「English V(RW)」に引き続き、「English I」-「EnglishIV」で培われた四技能にわたる英語の総合的能力を土台に、リーディングとライティングの分野に特化したさらに上級の英語能力の育成を目指す。原則として日本人教員が担当し、精読、多読、速読など、目的に応じた様々なリーディングのためのスキルやストラテジー、レポートや論文を書くための実践的なライティング力の習得を目指す。授業は、講義や発表、レポート作成等、様々な形式で行われる。	
	Chinese V (LS)	日常的なコミュニケーションに必要な日常会話や一般向けのラジオ番組、テレビ番組の内容を6割以上聞き取り理解すること、また、日常生活や基本的な対人的コミュニケーションに必要な内容をほぼ正確に表現し、言いたいことをほぼ的確に相手に伝えることが出来るようになることを目標とする。更に(1)自分の意見や疑問を適切に相手に伝える力、(2)相手の疑問や意見を傾聴する力、(3)議論を適切かつ合理的に進める力の3つの力を養うことを目的とする。 (田禾 専任講師) (王松 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	ChineseVI (LS)	日常的なコミュニケーションに必要な日常会話や一般向けのラジオ番組、テレビ番組の内容を6割以上聞き取り理解すること、また、日常生活や基本的な対人的コミュニケーションに必要な内容をほぼ正確に表現し、言いたいことをほぼ的確に相手に伝えることが出来るようになることを目標とする。更に(1)自分の意見や疑問を適切に相手に伝える力、(2)相手の疑問や意見を傾聴する力、(3)議論を適切かつ合理的に進める力の3つの力を養うことを目的とする。また、検定試験なら、中国語検定試験1級またはHSK6級のレベルに達することを目指す。 (田禾 専任講師) (王松 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	Chinese V (RW)	一般向けの読み物や新聞記事を、正しい発音で、流暢に読み、その内容もほぼ正確に理解すること、また、一般向けの文章を作成することが出来るようになることを目標とする。日常的なコミュニケーション活動に必要な文献や調査報告などの読解力、その文献や調査報告などをほぼ正確に要約したり文章化したりすることを集中的に鍛錬し、「読む」能力と「書く」能力の向上を目指す。読解力や文章の作成力を向上させるために、言語表現の形式と表出する意味の違いに焦点を当てる。 (郭雲輝 兼任講師) (任鷹 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	ChineseVI (RW)	一般向けの読み物や新聞記事などの内容を正確に理解し、表現の違いによるニュアンスも読解でき、また、一般向けの文章やレポートを作成することが出来るようになることを目標とする。大学生活に必要な文献などの読解力、その文献などを正確に要約したり文章化したりすることを集中的に鍛錬し、「読む」能力と「書く」能力の向上を目指す。読解力や文章の作成力を向上させるために、言語表現の形式と表出する意味の違いに焦点を当てる。また、検定試験なら、中国語検定試験1級またはHSK6級のレベルに達することを目指す。 (郭雲輝 兼任講師) (任鷹 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目 第1外国語中級	Korean V (LS)	リスニングとスピーキング中心の上級クラス。母語を介さず、Koreanで考え、Koreanで自分の意見をまとめ、さらにそれをKoreanで組み立てて発話するための練習をする。講演やニュース、ドラマ・映画など、実際の発話例を使用し、その内容の理解にとどまらず、発音やイントネーションの向上も目指す。受講者の積極的な参加を前提に、通訳の訓練法なども取り入れながら、聴解と発話の両技能をバランスよく磨いていく。	
	Korean VI (LS)	リスニングとスピーキング中心の上級クラス。微妙なニュアンスの違いを重視する高度な日常会話を含め、専門性の高い場面などで要求されるような上級レベルの理解力とともに、各状況に応じた話し方を習得していく。また、自分の意見を伝える際も、より正確な発音とイントネーションで分かりやすく話す、ワンランク上のスピーチ・スキルを身につけていく。授業での使用言語は基本的にKoreanのみとする。受講者の積極的な参加が求められる。	
	Korean V (RW)	リーディングとライティング中心の上級クラス。読解と作文の基本になるのは「語彙力」であるが、単語や表現を「自由に使いこなせる」ためには、丸暗記ではなく、実際の文例を使った相互補完的な訓練が必要となる。この授業では、新聞記事や論説文から小説、漫画などに至るまで、多種多様なテキストから優れたKoreanの文例を選び、それを読みながら語彙力・読解力・文章力を総合的に伸ばしていく。さらに、趣旨の把握や要約、話し言葉と書き言葉の使い分けなど、ワンランク上の運用能力を目指す。	
	Korean VI (RW)	リーディングとライティング中心の上級クラス。政治家の演説や観光案内文、製品の取扱説明書、広告のコピーなど、あらゆる分野において異なる機能・目的を持って書かれた様々なテキストに触れ、それらを正しく理解する読解力を養う。さらに、場面や目的に合わせた語彙・言い回しを駆使して文章が書けるような力を身につけるため、言語的知識と言語外知識を総合的に学習していく。授業での使用言語は基本的にKoreanのみとする。受講者の積極的な参加が求められる。	
	Japanese V (LS)	大学生活で必要とされる対話コミュニケーション能力の向上を目指す。グループでの議論やプレゼンテーション活動を通して、(1)自分の意見や疑問を適切に相手に伝える力、(2)相手の疑問や意見を傾聴する力、(3)議論を適切かつ合理的に進める力、の3つを養うことを目的とする。さまざまな社会問題について、その背景や原因、現状を調査し、グループで議論する。議論した内容の趣旨をプレゼンテーションし、それに対して自己評価、他者評価を行い、各自が自らの能力を客観的に把握することで能力の向上を目指す。 (竹口智之 専任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	Japanese VI (LS)	場面や状況に応じた日本語表現を習得し、目的に応じた適切な表現の選択ができるようにする。ここでは主にビジネスコミュニケーションへの理解を深める。ビジネスにおけるルールや言語表現等、ビジネス場面で求められる日本語運用能力を習得し、就職活動に必要な日本語運用能力を強化することを目指す。ビジネス会話教材などによる基本的なビジネス表現を学ぶ。また、就職活動に必要な自己分析や志望動機の手書きなども練習する。面接練習やプレゼンテーションを通して、自身の魅力を十分に発揮できる自己表現方法を訓練する。 (竹口智之 専任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	Japanese V (RW)	専門分野での研究活動に必要な、文献の読解力と、文章表現技術の向上を目指す。文献・調査報告などを正確に要約したり、客観的に論述したりすることを重点的に鍛える。論文によく使われる語彙や表現、論文の構成などを身に付ける。論文作成のプロセスに従って授業を進めるが、日本語表現力向上のための練習も適宜行う。論文執筆に必要な知識を身に付け、文章表現能力をみがく。論文内容をよりよいものにするため、グループまたはペアでの活動を取り入れ互いにコメントし合う。 (竹口智之 専任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
Japanese VI (RW)	現代の日本の身近な文化や社会問題への理解を深め、社会背景との関連について考察する。それぞれに異なる文化を持った留学生同士で意見や感想を述べあったり、ディスカッションしたりすることで現代の日本の文化や社会に対する考えを深めることを目指す。映画、テレビ、コマーシャルや、新聞記事、雑誌記事などのメディアを批判的に読み取る。グループごとに、関心のある身近な文化や社会問題をテーマに選び、その原因や社会的背景などを考察し、レポートにまとめ、プレゼンテーションする。 (竹口智之 専任講師) (笹井香 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目 第1外国語上級	English VII (Presentation)	週に2回開講されるこの授業は、国際学部の英語プログラムの中では最上級に位置づけられるものである。受講生の専攻分野を考慮した専門性の高い英語力を育成することを主な狙いとする。専門分野でのレポートや論文を書くための上級ライティング能力、学会発表や会議報告等を想定したプレゼンテーションのための上級オーラルコミュニケーション能力の育成を目指し、原則として英語ネイティブ教員による指導が行われる。必要に応じてPC教室の機器やAV機器を駆使することで、より実践的な指導を行う。	
	English VIII (Presentation)	週に2回開講されるこの授業は、国際学部の英語プログラムの中では最上級に位置づけられるものである。「English VII (presentation)」に引き続き、受講生の専攻分野を考慮した専門性の高い英語力を育成することを主な狙いとする。専門分野でのレポートや論文を書くための上級ライティング能力、学会発表や会議報告等を想定したプレゼンテーションのための上級オーラルコミュニケーション能力の育成を目指し、原則として英語ネイティブ教員による指導が行われる。必要に応じてPC教室の機器やAV機器を駆使することで、より実践的な指導を行う。	
	Chinese VII (Presentation)	相手の発話を理解し、ほぼ的確に相手に意見や感想を伝えたり、ディスカッションを通して、相手を説得したり、あるいはまた新聞記事や文献などの内容を正確に読解し、自分の考え方をレポートや文章に纏めることが出来るようになることを目標とする。要するに、中国語の総合力の向上を目指す。「聞く・話す・読む・書く」といった四技能を駆使し、比較的自由にコミュニケーションを行うように、中国語を道具として身につける。	
	Chinese VIII (Presentation)	相手の発話を理解し、ほぼ的確に相手に意見や感想を伝えたり、ディスカッションを通して、相手を説得したり、あるいはまた新聞記事や文献などの内容を正確に読解し、自分の考え方をレポートや文章に纏めることが出来るようになることを目標とする。要するに、中国語の総合力の向上を目指す。「聞く・話す・読む・書く」といった四技能を駆使し、比較的自由にコミュニケーションが行えるように、中国語を道具として身につける。また、検定試験なら、HSK8級のレベルに達することを目指す。	
	Korean VII (Presentation)	Koreanの上級クラス。ネイティブに近いレベルの運用能力を学習目標とし、はっきりした目的意識を持って特定分野の実用的なスキルを重点的に磨くクラスである。プレゼンテーション、ディベート、インタビュー、研究発表、ビジネストークなど、様々な状況を想定し、準備から実施までの過程をシミュレーションするなど、実践的な訓練を行う。受講者の積極的な参加が求められる授業であり、基本的にKoreanのみで進められる。 (柳圭相 兼任講師) (尹盛熙 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	Korean VIII (Presentation)	Koreanの最上級クラス。ネイティブに近いレベルの運用能力を学習目標とし、はっきりした目的意識を持って特定分野の実用的なスキルを重点的に磨くクラスである。「Korean VII (Presentation)」に引き続き、学生のニーズを反映した実践的な授業を行う。Koreanによる論の組み立てとその表現技術の更なるレベルアップを目指し、具体的な場面を想定して実演形式で練習を行う。受講者の積極的な参加が求められる授業であり、基本的にKoreanのみで進められる。 (柳圭相 兼任講師) (尹盛熙 専任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	Japanese VII (Presentation)	雑誌には、さまざまな日本語の表現がある。それを理解するとともに、自ら雑誌を作る過程において、学生同士がディスカッションをして読者の興味をひきつけることができるような見出しや記事を考えることで、今までに学んできた論文やレポートを作成する場合は異なるタイプの文章表現力を習得することを目指す。雑誌作りの基本を学び、学生自身が企画、取材、執筆、撮影、レイアウト、校正などを行う。自分達が作った雑誌を批評しあう。	
	Japanese VIII (Presentation)	新聞には、特有の言い回しや表現が多くある。それを理解するとともに、学生達が自ら新聞を作る過程において、学生同士でディスカッションして読者の興味をひきつけることができるような見出しや記事を考えることで、今までに学んできた論文やレポートを作成する場合は異なるタイプの文章表現力を習得することを目指す。最終的に自分たちの新聞を完成させる。記事の書き方、取材の仕方などを講義形式で学んだうえで、実際に取材活動や撮影、記事の執筆、編集などを行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目	第2外国語初級 英語 I	第2外国語として英語を学ぶ学生を対象とした授業であり、週に2回開講される。リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の基礎的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員であり、四技能を有機的に連携させ、バランスをとりながら英語の総合的な基礎力育成のための指導が行われる。授業は、講義の他にペアワークやグループワーク等、十分な言語活動の機会を確保するために様々な形態で行われる。	
	英語 II	第2外国語として英語を学ぶ学生を対象とした授業であり、週に2回開講される。「英語 I」に引き続き、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の基礎的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員であり、四技能を有機的に連携させ、バランスをとりながら英語の総合的な基礎力育成のための指導が行われる。授業は、講義の他にペアワークやグループワーク等、十分な言語活動の機会を確保するために様々な形態で行われる。	
	中国語 I	第2外国語でなおかつ初習言語として位置づけられることを意識しながら、合理的に時間を配分し、中国語の発音を徹底的に習得させることや、中国語における最も基本的な表現である、判断文や存在所有文の基本を習得することを目標とする。中国語は、道具として位置づけ、理論的説明を中心とせず、教員がコーチの役割を果たし、四技能における「聞く」と「話す」の能力を重点的に訓練することによって、目標が達成されることを目指す。 (森宏子 兼任講師) (孫輝 兼任講師) (原由起子 兼任講師) (欒玉璽 兼任講師) (苞山武義 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	中国語 II	発音の復習をしながら、その習得の結果を確認しつつ、中国語の形容詞述語文、動詞述語文の習得や、また、日本語の時間表現との違いに留意しながら、中国語の時間表現の基本を習得することを目標とする。視覚教材も併用し、これまで学んできた判断文や存在所有文とともに、最も簡単な「聞く・話す・読む・書く」ことができるようになることを目指す。いろいろなコミュニケーションの場面を想定しながら、日常生活や対人的コミュニケーションに役に立つ話題を中心に練習を行っていく。 (森宏子 兼任講師) (孫輝 兼任講師) (原由起子 兼任講師) (欒玉璽 兼任講師) (苞山武義 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	朝鮮語 I	入門朝鮮語学習における聞く、話す、読む、書く、の四技能の総合的な学習によって、朝鮮語の文字や発音の仕方をはじめとするもっとも基礎的な朝鮮語能力を身につけることを目標とする。授業は、朝鮮語のネイティブ教員2名のペアによるチーム・ティーチングで行われる。 (孫才喜 兼任講師) (柳圭相 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	朝鮮語 II	入門朝鮮語で学んだ基礎的な朝鮮語知識をもとに、初級レベルの聞く、話す、読む、書く、の四技能の完成を目指す。「朝鮮語 I」に引き続き、朝鮮語の文字や発音の仕方をはじめとする基礎的な朝鮮語能力を身につける。授業は、朝鮮語のネイティブ教員2名のペアによるチーム・ティーチングで行われる。 (孫才喜 兼任講師) (柳圭相 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	ドイツ語 I	はじめて学ぶドイツ語に親しみがもてる授業をめざす。導入となるこの授業では、コミュニケーションの初歩として、出会い、自己紹介など、あたらしい世界や人々と出会う際のさまざまな状況を想定し、ドイツ語による発話と自己表現、簡単な質問と応答などを身につけていく。聞き取り、発話、文字情報の読み取りが中心になるが、文法についても必要に応じて学んでいく。テキストはドイツで外国人学習者向けに開発されたものを使用し、授業は二人の教員の連携のもとで、可能な限りドイツ語を使用した、対話形式の授業を行う。 (田村和彦 専任教授) (宗像まさ子 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	ドイツ語 II	「ドイツ語 I」からの継続で、さらに多くの場面でのドイツ語の運用能力を身につけていく。身近な生活情報や買い物、交通、アクティビティー、といった場面に即して、ドイツ語による発話と自己表現、質問と応答の仕方などを身につけていく。ドイツをはじめとするドイツ語圏の国々やその文化に関するランデスクンデ(地域情報)の学習も授業に取り入れ、ドイツ語圏への興味を培いながら言語習得を推進する。テキストは「ドイツ語 I」からの継続で、授業は二人の教員の連携のもとで、可能な限りドイツ語を使用した、対話形式の授業を行う。 (田村和彦 専任教授) (宗像まさ子 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目	第2外国語初級 フランス語 I	フランス語の文法学習、読解、会話練習を柱とし、初歩的なフランス語の文章を読みこなし、聞き取り、また簡単なフランス語会話を組み立てて運用する語学力の涵養を目指す。発音規則や動詞の直説法現在における活用への習熟を核とした文法解説と問題演習、簡単な文章の読解、聞き取り・書き取り演習を講義形式で行い、また簡単なあいさつや会話文の発音練習を、学生参加のもとに対話形式で練習していく。2名の教員が緊密な連携のもと、同一クラスを週2回のリレー形式で講義する。 (重松健人 兼任講師) (徳永雅 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	フランス語 II	「フランス語 I」の内容をふまえて、文法学習、読解、会話練習を柱とし、初歩的なフランス語の文章を読みこなし、聞き取り、また簡単なフランス語会話を組み立てて運用する語学力の涵養を目指す。動詞の直説法における過去・未来表現、条件法、関係代名詞等を中心とした文法解説と問題演習、読解、聞き取り・書き取り演習を講義形式で行い、また設定された場面における簡単な会話文の作成を、学生参加のもとに対話形式で練習していく。2名の教員が緊密な連携のもと、同一クラスを週2回のリレー形式で講義する。 (重松健人 兼任講師) (徳永雅 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	スペイン語 I	この授業の目的は、スペイン語の聞く、話す、読む、書く基礎能力を身につけ、さらにスペイン語圏の社会事情を知ることである。授業は週2回で、そのうちの一回は日本人教員が担当し、おもに文法を学習する。さらにもう一回はネイティブ教員が担当し、既習の文法事項を会話で応用する。「スペイン語 I」では、アルファベット、発音とアクセントの規則、冠詞、名詞の性と数、形容詞の性と数、動詞estar・ser・haber、所有形容詞、指示形容詞と指示代名詞、および動詞現在形の規則活用をおもに学習する。 (小林貴徳 兼任講師) (Jordi Tordera 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	スペイン語 II	スペイン語の文法および会話能力をさらに伸ばし、同時にスペイン語圏の社会事情を引き続き学んでいく。授業は週2回で、そのうちの一回は日本人教員が担当し、おもに文法を学習する。さらにもう一回はネイティブ教員が担当し、既習の文法事項を会話で応用する。「スペイン語 II」では、動詞現在形の不規則活用、数字、否定語と不定語、gustar型動詞、季節・月・曜日・日付・時刻の表現、および天候の表現をおもに学習する。 (小林貴徳 兼任講師) (Jordi Tordera 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
第2外国語中級	英語 III	第2外国語として英語を学ぶ学生を対象とした授業であり、週に2回開講される。「英語 II」に引き続き、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能の発展的能力の育成を目指す。担当者は原則として日本人教員であり、四技能を有機的に連携させ、バランスをとりながら英語の総合的な発展的能力育成のための指導が行われる。授業は、講義の他にペアワークやグループワーク等、十分な言語活動の機会を確保するために様々な形態で行われる。	
	英語 IV	第2外国語として英語を学ぶ学生を対象とした授業であり、週に2回開講される。「英語 III」に引き続き、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングといった英語四技能のさらなる発展的能力の育成を目指す。第2外国語としての英語習得の仕上げを行う。担当者は原則として日本人教員であり、四技能を有機的に連携させ、バランスをとりながら英語の総合的な発展的能力育成のための指導が行われる。授業は、講義の他にペアワークやグループワーク等、十分な言語活動の機会を確保するために様々な形態で行われる。	
	中国語 III	「聞く・話す・読む・書く」といった四技能の訓練を中心に、中国語の可能表現、希望表現、比較表現の基本を習得することや、また、視覚教材も併用しながら、日常生活や対人的コミュニケーションに最も必要とされる中国語表現の基礎を習得することを目標とする。二年生の春学期は勉強の倦怠期と言われるほど、学生のモチベーションが比較的に低下している時期であることを念頭に、教授法を工夫しながら、効率よく授業を進めていく。 (苞山武義 兼任講師) (孫輝 兼任講師) (原由起子 兼任講師) (樂玉璽 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	中国語 IV	「聞く・話す・読む・書く」といった四技能の訓練を中心に、日本語の表現と比較しながら、中国語の「把構文」、受身文、使役文、複雑述語(結果補語、方向補語、様態補語、可能補語、数量補語、前置詞フレーズ補語)などを用いる表現の基本を習得し、視覚教材も併用しながら日常生活や対人的コミュニケーションに最も必要とされる中国語表現の基礎を習得することを目標とする。継続学習や再度学習を備えて、中国語の基礎をしっかりと習得させる。 (苞山武義 兼任講師) (孫輝 兼任講師) (原由起子 兼任講師) (樂玉璽 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目 第2外国語中級	朝鮮語Ⅲ	「朝鮮語Ⅰ」、「朝鮮語Ⅱ」で学んだ、基礎的な朝鮮語知識と中級レベルの聞く・話す・読む・書くの四技能をもとに、中級レベルの朝鮮語運用能力を身につけることによって、日常生活におけるコミュニケーション能力を高めるとともに朝鮮文化への理解にも努める。授業は、朝鮮語ネイティブ教員2名のペアによるチーム・ティーチングで行われる。 (孫才喜 兼任講師) (柳圭相 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	朝鮮語Ⅳ	「朝鮮語Ⅰ」、「朝鮮語Ⅱ」で学んだ、基礎的な朝鮮語知識と中級レベルの聞く・話す・読む・書くの四技能をもとに、中級レベルの朝鮮語運用能力を身につけることによって、日常生活におけるより円滑なコミュニケーション能力を高めるとともに、さらに朝鮮文化への理解に努める。授業は、朝鮮語のネイティブ教員2名のペアによるチーム・ティーチングで行われる。 (孫才喜 兼任講師) (柳圭相 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、一人当たり週1回の授業を行う。
	ドイツ語Ⅲ	「ドイツ語Ⅰ」、「ドイツ語Ⅱ」をベースとして、ドイツ語の運用能力をさらに確かなものにしていく。日本と近似的な生活場面だけでなく、文化、社会、経済といった、より複雑な場面で使われるドイツ語にも目を向け、広義の「文化接触」を想定してドイツ語を学習する。そこでは、ドイツ語圏の文化や経済、社会への興味を喚起し、それらの情報に自主的にアクセスする方法も実践的に学ぶ。授業はネイティブを含む二人の教員の連携のもとで、可能な限りドイツ語を使用して行う。 (Holger Robert Bungsche 専任准教授) (宗像まさ子 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	ドイツ語Ⅳ	ドイツ語学習の仕上げとなるこの授業では、「ドイツ語Ⅲ」に続き、文化、社会、経済といった、より複雑な場面で使われるドイツ語に目を向け、広義の「文化接触」を想定してドイツ語を学習する。高度な運用能力をつけるためには、大学での二年間の学習だけではなく、研修や留学を通じて、大学外で学習を続けていくが必要になる。この授業では、将来、ドイツ語圏と直接に接触することを想定して、生涯学習につながる言語修得の足がかりを育てたい。授業はネイティブを含む二人の教員の連携のもとで、可能な限りドイツ語を使用して行う。 (Holger Robert Bungsche 専任准教授) (宗像まさ子 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	フランス語Ⅲ	初級フランス語の文法・語彙知識等をふまえて、より実践的なフランス語の読解・会話能力の涵養を目指す。既習の文法事項の再確認をしながら、仏和辞典を用いて中級レベルのフランス語の文章を読み解いていく講義形式の授業を一つの柱とし、また視聴覚教材等も使用しながら、場面に応じた簡単な日常会話を組み立てていく対話形式の授業をもう一つの柱とする。2名の教員が緊密な連携を取りながら、同一クラスを対象に週2回の講義を、それぞれ講読と会話とに分けて進めていく。 (重松健人 兼任講師) (徳永雅 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	フランス語Ⅳ	「フランス語Ⅲ」までの講義内容をふまえ、さらに高度なフランス語の読解・会話能力の涵養を目指す。学生の習熟度に応じて文法事項の再確認をしながら、新聞・雑誌記事や文学作品等を読みこなす読解力の養成を目指す講義形式の講読と、講読で得た知識を前提とした日常会話能力の養成を目指す対話形式の授業とが二本の柱となる。「フランス語Ⅲ」同様、2名の教員が緊密な連携を取りながら、同一クラスを対象に週2回、それぞれ講読と会話とに分けて進めていく。 (重松健人 兼任講師) (徳永雅 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	スペイン語Ⅲ	スペイン語の聞く、話す、読む、書く能力をさらにのばし、また、スペイン語圏の社会事情への理解を深めていく。授業は週二回で、そのうちの一回は日本人教員が担当し、おもに文法を学習する。さらにもう一回はネイティブ教員が担当し、既習の文法事項を会話で応用する。「スペイン語Ⅲ」では、比較級と最上級、関係代名詞、現在進行形、再帰動詞、現在完了をおもに学習する。 (小林貴徳 兼任講師) (Jordi Tordera 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。
	スペイン語Ⅳ	これまで以上に難易度の高いスペイン語文法とその応用を学ぶ。また、スペイン語圏の社会事情について、学生自らが調べ、教員がコメントする。授業は週2回で、そのうちの一回は日本人教員が担当し、おもに文法を学習する。さらにもう一回はネイティブ教員が担当し、既習の文法事項を会話で応用する。「スペイン語Ⅳ」では、受け身表現、点過去、線過去、未来形、間接話法、接続法現在の活用と用法、および命令法をおもに学習する。 (小林貴徳 兼任講師) (Jordi Tordera 兼任講師)	共同担当 週2回の授業1クラスを2名で担当し、「聞く・話す・読む・書く」を分担して一人当たり週1回の授業を行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目	英語短期留学TRT	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、英語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。約4週間のトロント大学への短期留学においては、英語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	英語短期留学QUE	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、英語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。約4週間のクイーンズ大学への短期留学においては、英語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	英語短期留学OXF	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、英語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。約4週間のオックスフォード大学への短期留学においては、英語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	英語短期留学STL	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、英語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。約4週間のスターリング大学への短期留学においては、英語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	英語短期留学NSW	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、英語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。4週間余りのニューサウスウェルズ大学への短期留学においては、英語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	英語中期留学MTA	英語コミュニケーション能力の向上のみならず、留学によって体験する異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。約16週間に亘ってマウント・アリソン大学にて集中的に英語を学ぶとともに、マウント・アリソン大学の学生や地域の人々との交流、フィールドトリップなど様々な活動を通じて、英語力、異文化理解力を身につける。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための授業を行う。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績の評価、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
英語中期留学TRT	英語コミュニケーション能力の向上のみならず、留学によって体験する異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。約13週間に亘ってトロント大学にて集中的に英語を学ぶとともに、トロント大学の学生や地域の人々との交流、フィールドトリップなど様々な活動を通じて、英語力、異文化理解力を身につける。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための授業を行う。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績の評価、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。		

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
言語教育科目	英語中期留学QUE	英語コミュニケーション能力の向上のみならず、留学によって体験する異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。約13週間に亘ってクイーンズ大学にて集中的に英語を学ぶとともに、クイーンズ大学の学生や地域の人々との交流、フィールドトリップなど様々な活動を通じて、英語力、異文化理解力を身につける。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための授業を行う。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績の評価、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	英語中期留学STL	英語コミュニケーション能力の向上のみならず、留学によって体験する異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。約13週間に亘ってスターリング大学にて集中的に英語を学ぶとともに、スターリング大学の学生や地域の人々との交流、フィールドトリップなど様々な活動を通じて、英語力、異文化理解力を身につける。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための授業を行う。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績の評価、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	中国語短期留学	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、中国語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。4週間余りの吉林大学または蘇州大学への短期留学においては、中国語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	中国語中期留学	中国語コミュニケーション能力の向上のみならず、留学によって体験する異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。約20週間に亘って吉林大学にて集中的に中国語を学ぶとともに、吉林大学の学生や地域の人々との交流、フィールドトリップなど様々な活動を通じて、中国語力、異文化理解力を身につける。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための授業を行う。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績の評価、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	朝鮮語短期留学	留学経験を通して、異文化理解を深めるとともに、朝鮮語コミュニケーション能力の強化をはかる。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための教育を行う。4週間余りの延世大学への短期留学においては、朝鮮語コミュニケーション能力の向上のみならず、異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	
	朝鮮語中期留学	朝鮮語コミュニケーション能力の向上のみならず、留学によって体験する異文化との接触や現地の人々との交流を通して国際的な視野を身につけ、本学部の教育目標の一つである世界市民の一員としての自覚を促すことを目的とする。約20週間に亘って延世大学にて集中的に朝鮮語を学ぶとともに、延世大学の学生や地域の人々との交流、フィールドトリップなど様々な活動を通じて、朝鮮語力、異文化理解力を身につける。留学の前後に、留学科目担当の専任教員による事前・事後指導を行い、留学の効果を高めるための授業を行う。成績評価および単位認定方法は、①事前・事後指導における学習態度および成績の評価、②留学先大学での語学研修の成績の評価、以上①②を留学科目担当の専任教員が総合的に判断し、最終評価を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際基礎科目 第1類 (入門的科目)	国際地域理解入門A	<p>(概要)北米(アメリカとカナダ)地域を中心に、各地域の学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に関する授業から、国際地域理解の全体像を知る。この講義では、各学問領域に跨る専任教員が、各教員の研究アプローチから北米(アメリカとカナダ)地域に焦点をあて、次のとおりオムニバス方式で講義する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (杉山 直人 専任教授/2回) まず、本講義全体の目的と授業内容を概説する。次に、アメリカ南部の歴史と南部小説をからませ、19世紀から20世紀にいたるアメリカ南部の文化的風土を考える。</p> <p>(山本 雅代 専任教授/1回) 人口の約1/4が家庭で英語以外の言語を話すと言われる米国・ハワイ州。この多言語社会の言語事情を概観する。</p> <p>(長谷 尚弥 専任教授/1回) 言語に現れる北米地域の文化を理解することを目指す。併せて、北米言語教育事情についても考える。</p> <p>(Eun Ja Lee 専任准教授/1回) アジア系アメリカ人の歴史、生活、アイデンティティなどを学んで現代アメリカ社会を考察し、世界各地に500万人とも言われるコリアンディアスポラの歴史的形成過程を通し、東アジアと北米の国際関係を概観する。</p> <p>(櫻田 大造 専任教授/1回) 戦後の米国とカナダの政治と外交に関する基礎的知識を、両国の制度や実態を比較することで習得する。</p> <p>(丸桶 恭一 専任教授/1回) 「戦後日本を論ずる営み」が日米関係と密接に関連しながら展開してきたことに関して、その歴史的経緯に沿って理解を図る。</p> <p>(吉村 祥子 専任教授/1回) 人権条約にみる地域性:地域的人権条約(欧州、米州、アフリカなど)における特徴と地域的な人権保障の制度について解説する。</p> <p>(鷲尾 友春 専任教授/1回) 多面的価値を有する米国社会で、政治が果たす利害調整機能を、議会での通商関連法制定の歴史を通じて概観する。</p> <p>(大石 太郎 専任准教授/1回) 南の隣国アメリカ合衆国とは異なる歴史を歩んできたカナダを知るための第一歩として、その自然と社会を概観する。</p> <p>(楠 綾子 専任准教授/1回) アメリカ社会をもっとも特徴づけるのは、その民族的、人種的多様性であろう。移民国家アメリカの成り立ちを、移民政策を軸に解説する。</p> <p>(榎本 悟 専任教授/1回) カナダの経済・企業と日・米企業の関係やその特徴について、概説的に講義する。</p> <p>(宮田 由紀夫 専任教授/1回) アメリカの大学の産業分析:アメリカの大学のタイプ、競争の形態、政策、消費者(学生)や社会への影響を考察する。</p> <p>(児島 幸治 専任准教授/1回) 財務報告の意義・経済的影響・現代的課題について、北米企業の公表する財務データを用いながら実践的に学ぶことを目的とする。</p> <p>(Holger Robert Bungsche 専任准教授/1回) フォーダイズムについて、アメリカの現代社会、経済、政治システム、社会・経済システムを把握したうえで、そのグローバルな未来について論ずる。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>授業代表者(杉山 直人 教授)が各教員の評価を取りまとめ、成績評価を行う。</p>

授 業 科 目 の 概 要				
(国際学部国際学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
国際基礎科目	第1類(入門的科目)	国際学入門	<p>(概要)「国際」を切り口とした学問分野に基づき、各学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)の専任教員が、各研究分野について、オムニバス方式で授業を行う。これにより国際学の分析枠組みに関する全体像を学ぶ。各授業時間内で、クイズやテストを実施して、受講学生の理解力を判定していく。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (櫻田 大造 専任教授/2回) まず、本講義全体の目的と授業内容を概説する。次に、国際政治システムと国内政治システムの相違と共通点について、現実主義的国際関係理論の観点から概説する。 (尹 盛熙 専任講師/1回) 国際化が進むにつれその重要性が増している「通訳・翻訳」の理論と実践に関して、概要を紹介する。 (山本 雅代 専任教授/1回) 世界に数多ある言語。それらの言語を複数話す人やそれらの言語を複数内包する社会についての諸課題を概観する。 (丸楠 恭一 専任教授/1回) 国際間における文化の接触と変容に関する理解のためのマルチディシプリナリーな視座について、その基礎的理解を図る。 (王 昱 専任准教授/1回) 米国発の金融不安・信用収縮を背景に、急速に発展しつつある中国資本市場の過去と現状について概説する。 (平林 孝裕 専任教授/1回) グローバル化がすすむ現代において、キリスト教が抱える諸問題を、多文化共生社会へと変貌しつつある北欧デンマークの事例から考察する。 (専任教授/1回) 経済発展(開発)は政治と不可分であり、経済学以外にも政治学からのアプローチが可能である。中国を事例に簡潔に解説する。 (吉村 祥子 専任教授/1回) 国際社会のルールを知るために、国際法の成り立ちや、しくみについて、具体的な事例を用いながら説明する。 (榎本 悟 専任教授/1回) 企業の国際化が進展するとともに、海外の競争相手といかに競争して、持続的な競争優位を確保・維持するのかがということを概説的に講義する。 (伊藤 正一 専任教授/1回) 日常我々の周りにある様々な経済的事象を、簡単なミクロ経済学とマクロ経済学の理論を用い、説明できることを紹介する。 (木本 圭一 専任教授/1回) IASBが公表している国際財務報告基準の基本的な考え方について解説し、各国会計について概観する。 (田村 和彦 専任教授/1回) 異なる地域間の紛争・調停の試みを、欧州を中心にふたつの世界大戦からEU体制に至るまでの戦後の歩みから検証する。 (志甫 啓 専任講師/1回) 国際的な人の移動にはどのような形態が存在するのかを論じ、移動に関わる社会的な問題や期待について解説する。 (杉山 直人 専任教授/1回) 異文化体験を通じ、主に明治期の日本人がアメリカ文化をどのようにとらえたかを日本文学を題材に考える。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>授業代表者(櫻田 大造 教授)が各教員の評価を取りまとめ、成績評価を行う。</p> <p>教授は平成23年4月就任のため、平成22年度は櫻田 大造 教授が担当する。</p>
		ライフ・デザイン入門	<p>大学卒業後の進路やキャリアにはどのようなものがあるのか。また、そのキャリアをめざすにはどのようなようにすればよいのか。現在の学生には切実な問題である。本科目は入学間もない一年生を対象にしてさまざまなキャリアを紹介し、その内実を理解し、そしてそのキャリアに至るにはどのような準備が必要かを認識してもらうことを目的とする。授業ではさまざまな分野で活躍している方を招いて体験や苦勞談をしてもらい、学生たちに職業生活の厳しさや喜びを伝える。</p>	
	第2類(基礎的科目)	比較文化論基礎	<p>文化の比較が行われる一番手近な例は、われわれが異なる土地を旅し、異なる人々と出会う場合である。そこでは、文化や生活習慣の違いが自国にいる場合以上に切実に意識される。しかも異文化が素直に受容され、それへの順応が行われるのはまれな場合で、多くは衝突、干渉、抵抗、拒絶をともなう。この講義では、「近代化」をキーワードにして、さまざまな未知のものとの出会いencounterの例を取り上げ、そこから何が生まれ、何が排除され、どう価値づけられたかを見ていく。アジアや第三世界に向けられた西欧のまなざしが例となる。</p>	
	文化人類学基礎	<p>文化人類学は、文化を客観的に見る視点を養う学問である。その際の文化とは、狩猟・採集文化から現代社会における若者文化まで幅広い。今日、グローバル化が進展する中で、旅行やメディア等を通して異文化に接する機会は増加している。また、常に変化を遂げる現代社会における都市文化は流動性に満ちている。本講義では諸民族の社会における文化から現代社会におけるサブカルチャーまで様々な文化について、理論的基礎としての文化人類学理論とその具体例への応用の双方を学ぶ。</p>		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際基礎科目	第2類(基礎的科目) 英米文学概論	主に17世紀から20世紀に至るアメリカ文学の流れを概観する。アメリカ文学は19世紀半ばになって初めて「独立」していく。その意味でヨーロッパ大陸、わけてもイギリス文学の影響にも配慮する必要がある。そのためイギリス文学についても、主だった文芸思潮については必要に応じて説明する。講義が中心となるが、学生諸君の理解を助けるために、最近では優れたものも多いビデオやDVDも補助的に用いる。また、19世紀以降の代表的アメリカ小説を数冊必読とする。	
	社会言語学基礎	人は言語を使用する際に、常に何らかの選択をしている。「お国言葉」か「標準語」か。「丁寧語」か「タメ口」か。「直裁な表現」か「婉曲な表現」か。なぜ、そのような選択をするのか。それは、人は言語を、社会的に位置づけられた自分と他者という関わりの中で用いるからに他ならない。すなわち、言語を介して、人は単に語や文の意味だけを伝達するのではなく、人と人あるいは集団と集団との社会的関係をも示そうとするからである。本講義では、言語を社会という枠組みの中で理解するための基礎的知識を概説する。	
	言語構造と意味表現基礎	人間は言語を使って情報を記録したり伝達したりする際に、まず、言葉の形式を選ぶ。その言葉の形式の選択は恣意的なものではない。つまり、人間はあるルールに従って、言葉の形式を選択し、その形式に付加される意味を活性化させながらコミュニケーションを行うのである。しかし、言葉の形式が同じであっても、表現しうる意味は必ずしも一つではない。言葉の形式とその形式で表現しうる意味とがどのような関係なのかがこの授業の最大の関心事であり、言葉の形式と意味の関係を理解するための最も基礎的な内容を中心に授業を進めていく。	
	哲学・思想基礎	哲学とは思想家の名前や概念の暗記のことではない。ましてや「生き方の教え」でもない。日々接している「世界」における様々なことがらを、思い込みや常識から自由になって考え直してみるからこそ、哲学の営みである。これまで哲学的思索に接したことがない学生を主たる対象とし、学問一般の基底に位置する「哲学すること」の楽しさと意義を、身近な問いを手がかりにして説明していく。具体的には「言語と思考」をテーマに、哲学者・言語学者の諸説を援用しながら、講義形式で授業を進める。	
	Introduction to Applied Linguistics	この授業は応用言語学(言語教育とほぼ同義)の入門コースであり、将来中高の英語教員を目指す学生や応用言語学分野での研究者を目指す学生だけでなく、広く言語や言語教育に関心を持つ学生を主な対象としたものである。語彙、文法、談話分析、語用論といった言語研究分野と同時に、第二言語習得、心理言語学、社会言語学といった応用言語学、4技能に代表される英語スキル分野における基礎的知識に関して、双方向の授業を行う。	授業は英語で行う。
	Language and Culture in Japan A	この授業では、日本語の学びを促進するようなトピックを検証することで、日本の言語と文化(社会)の間の相互関係の認識や理解を高めることを目標とする。この授業で扱う主なトピックは、1)日本の女性の言語と日本における女性の地位や役割、2)敬語(尊敬語)と日本社会、3)内と外(グループ内、グループ外)の概念、4)共感と日本の言語、5)非言語的コミュニケーションなどである。以下の流れで授業を行う。社会言語学への導入、日本語の特徴(語彙、文法、音システム、作文システム、方言など)、女性の日本語、日本語における性差別、女性の日本語と礼儀正しさ、日本語における敬語(尊敬語)、礼儀正しさの普遍性、敬語と縦社会の構造、日本人の謙虚さ、グループ意識と日本語(内・外と敬語、動詞のやり取り、呼び掛けシステム、親族名称など)、日本語のYes/Noシステム、あいづち非言語コミュニケーション。	授業は英語で行う。
	Language and Culture in Japan B	この授業は、「Language and Culture in Japan A」の続編として行う。授業の主な目的は、「Language and Culture in Japan A」で取り上げられたトピックについてのより深い理解を得ることである。特に、学生たちに日本語のデータを分析させ、たとえば日本語において「self(自己)」、「uchi-soto(内外)」、「empathy(共感)」等の概念がどのように符号化されるかを調査させることに焦点をあてる。若者ことばや大阪弁についても触れる。	授業は英語で行う。
	Japanese Linguistics	この授業では、日本語研究の中の主要テーマである、音声学、音韻論、形態論、統語論、社会言語学、歴史、方言、筆記システムを概観する。日本語のさまざまな言語学的な現象を、記述的・相対的視点から紹介すると同時に、さまざまな言語学的課題を検討することにおいて学生の分析力を発展させるため、日本語の類型学的特徴を説明する理論的な概念を紹介する。この授業は、学生たちが日本語のメタ言語知識を深め、広げることを助長する。	授業は英語で行う。
	国際関係論基礎	国際関係論を語るうえで、重要な国際思想(リアリズムとリベラリズム)の理解を中心に、この授業では国際関係のなかに重要な位置を占める安全保障の問題について、20世紀の国際平和と安全保障の歴史的な視点、国際安全保障を語る際に不可欠な中心的概念の理解、国際安全保障の文脈としての地域的な視点とグローバルイシューの4つの視点からアプローチすることを意図している。講義を中心とした構成にし、クイズを2回程度、定期試験を加えた総合評価で成績を決める。講義のなかではビデオ、新聞など講義内容を深める題材を適宜活用する。講義で扱うテーマは国際関係論におけるリアリズム、リベラリズムの特徴、同盟と外交、集団安全保障、2つの国際制度の比較(国際連盟と国際連合)、冷戦の起こりと終わり方などである。	

授 業 科 目 の 概 要

(国際学部国際学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際基礎科目 第2類 (基礎的科目)	現代国際関係史基礎	本講義は、現代の国際関係、とくにアジア・太平洋地域における国際関係の歴史的展開を理解することを目的とする。グローバル化の進展とともに国家間相互の結びつきを強める今日のアジア・太平洋地域は、一方で依然としてアメリカ、ロシア、中国、そして日本というパワーがしのぎを削る「場」でもある。このように多層的な地域がどのように形成されてきたのであろうか。講義では、アジア・太平洋地域における大国間関係の変容と相互依存の深化の様相を、ヨーロッパ世界の展開と重ね合わせつつ時系列的に解説する。	
	政治学基礎	本講義では、自由主義、民主主義、公共性などの政治学の基本的な概念について整理し、社会で発生する諸現象についての分析方法を検討する。政治学は必ずしも身近に感じることができない学問領域ではあるが、政治学の基本概念である権力関係は、国家と個人の間を規定するものであるし、また一般の人間関係の間でも頻繁に発生する。その意味で、決して個人から縁遠いものではない。このような視点から、講義では、身近に発生する具体的事例を題材として、政治学を身近なものとして扱い、政治学についての理解を深めることを目的とする。	
	社会システム論基礎	システム論とは生物体や組織体、あるいは自然現象を「部品」と、部品相互が恒常的な相互連関性を保とうとする「全体」、としてとらえる考え方である。社会学でも、社会全体あるいは社会の特定の側面をシステムとして分析する考えは、広く行き渡っている。この授業では、「システム論」を明確に意識した議論に加え、なんらかの意味でシステムの観点から社会を考察した諸学説を紹介し、それぞれの特徴、メリットやデメリット、さらに相互の関連性を検討する。	
	法学基礎	本講義は、法律初学者の受講生が、日常生活の様々な場面で出会う法律問題を通して、紛争の問題解決のための法の役割を学ぶことを目標とする。講義では、日常生活の中での契約やアクシデントに関する法、就職や労働に伴う雇用関係法、結婚や相続などの家族法等の身近な問題から、企業や商取引に関する法、民事・刑事の訴訟に関わる法など、これから様々な社会生活で出会うであろう法律問題を中心に、憲法や刑事法などの基礎的な内容を加えた法学全般にわたる入門的な理論・実例を解説し、受講生が法律学の基礎を習得することを旨とする。	
	国際法基礎	入門的な国際法の科目として、特に国際法の総論部分について講義する。内容としては、国際社会における国際法と国際法の特質、国家の要件や管轄権、国家主権などの国家と国際法の関係、国際法における主体(国家、国際機関、個人)、国際社会の組織化と国際法、国際法の規範構造と法源(条約、慣習国際法、法の一般原則など)、条約の締結手続きや留保、効力や解釈などの条約法、国際法と国内法の関係、国際責任、国際司法裁判所などの紛争解決、国際法と日本など。	
	日本社会論基礎	異文化を理解するためには自文化の理解が不可欠との観点から、本講義では主に近現代における日本社会に関する基礎的知識を習得し、理解を深めることを目標とする。そのために、日本の国土と自然環境、日本の諸地域とその特色、都市化と産業化、高度経済成長期以前の生活、高度経済成長と地域の変化、ポスト生産主義の時代における都市と農村との交流、少子高齢化と人口問題、外国人労働者と日本社会、外国人が見た日本社会などについて講義する。	
	国際社会論基礎	国境や主権国家の枠組を超えた社会過程を理解し分析する考え方の基礎について、国際政治経済論、近代化論、ナショナリズム及びエスニシティの社会理論、インターカルチュラルリティ等の諸分野の研究蓄積を踏まえて講義を行う。さらに、こうした基礎的理解をもとに、国際間の人的移動の増大、経済活動やコミュニケーションのグローバル化等に伴う具体的諸問題を各論として取り扱いながら、国際化する社会的問題にアプローチする視座を提示する。	
	国際紛争論	20世紀に2つの世界大戦を経験した後、現在に至るまで、国際社会では戦争が絶えない。2つの世界大戦の教訓を踏まえて、どのような国際社会の構築が図られたのか、戦後処理と平和構築の課題を学びながら、冷戦、地域紛争、民族紛争、テロとの戦争など各戦争について検証し、紛争はいかにして予防・解決していくべきかを考える。分析にあたって、国際社会の変容や科学技術の発達に伴う戦争の変化も取り上げながら、理論と歴史の相互検証を重視していく。	隔年開講
	Japanese Politics and Diplomacy	日本政治を理解する基礎として、日本の政治制度、立法府・行政府・官僚機構のしくみ、圧力団体やマスメディアなど政治アクターの機能、政党と選挙等について、主に米国との比較をもとにその特質について論ずる。また、日本外交を論ずる基礎として、外交政策の形成に関連する主要アクターである首相及びそのスタッフ、外務官僚、圧力団体等の役割や米国との関係について論じながら日本外交の基本原則を整理し、戦後日本外交が国内政治とどのように関係して展開されてきたかを講ずる。	隔年開講 授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要

(国際学部国際学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際基礎科目	第2類(基礎的科目) Introduction to International Relations	本講義は、特定の理論学習に偏ることなく、国際関係学における理論研究の全体像を把握することを目標としている。その為にまず、主要な学派(Neorealism, Neoliberal Institutionalism, Constructivism)の考え方と相違点を学ぶ。 次に、各学派の分析法を用い、冷戦後の世界が抱える具体的な国際問題(非政府アクターの台頭、グローバリゼーション、テロリズムや内乱、民族紛争の原因、国際組織の役割、民主主義と平和等)を検討する。リーディングの課題は、全て英語で書かれた文献を使用する。	授業は英語で行う。
	Introduction to Political Science	政治学とは何か。米国ではPolitical Science(政治科学)と呼ばれ、自然科学と同様に、普遍的で客観的な理論の構築を目指すことが主流であるが、政治学において客観的な知識の蓄積はどの程度可能か。また米国では、政治学と歴史学は別の学問とされるが、両者の対話はPolitical Scienceの向上にどの程度有用か。 これらの問いをテーマに、米国におけるPolitical Scienceの発展の歴史、現状と課題、日本の政治学との相違点を検討し、政治学の目的や方法論に対する受講生の考え方を養うことを目標とする。英語で書かれた文献を用いる。	授業は英語で行う。
	Prewar International History	本講義では、バックス・ブリタニカの終焉からバックス・アメリカーナの成立までの時期を政治外交史の観点から詳細に論じる。より具体的には、英米の対外政策を考察し、国際政治の舞台に占める両覇権国の重要性を比較・検討するが、アメリカの建国からその後の台頭までの大局的な歴史の流れに主眼を置く。そのため、当然、英米関係のみならず、アメリカと世界との関係にも焦点を当て、欧州、東アジア、中南米地域に対するアメリカのアプローチを紐解き、アメリカ外交の本質について説明する。なお、教材は邦語・英語の双方を用いる。	授業は英語で行う。
	International Conflicts	20世紀に2つの世界大戦を経験した後、現在に至るまで、国際社会では戦争が絶えない。2つの世界大戦の教訓を踏まえて、どのような国際社会の構築が図られたのか、戦後処理と平和構築の課題を学びながら、冷戦、地域紛争、民族紛争、テロとの戦争など各戦争について検証し、紛争はいかにして予防・解決していくべきかを考える。分析にあたって、国際社会の変容や科学技術の発達に伴う戦争の変化も取り上げながら、理論と歴史の相互検証を重視していく。	隔年開講 授業は英語で行う。
	Introduction to International Law	本講義は講義形式で行い、テキストとして“Akehurst’s Modern Introduction to International Law”(Peter Malanczuk著、Routledge、1997年)を使用する。目標は、国際法の基礎を学び、世界情勢の理解に役立てることである。授業計画としては、国際法の歴史と理論、法源、一元論と二元論、国際法主体、管轄権、条約、領土獲得および国家承継、人権、経済、環境、国家責任、紛争の平和的解決、人道法、国連憲章、国連の安全保障の順に学んでいく。	授業は英語で行う。
	経済学基礎	本講義の目的は、経済学の基礎知識をできるだけ平明にかつ厳密に解説することである。講義では、我々の暮らしと経済学がどのようにかかわっているかを、日常直面する様々な現代経済の事象を、簡単なミクロ経済学、マクロ経済学を用いて説明し、経済学の考え方を解説する。また、この講義を通じて、経済学で用いる基本的概念、例えば、需要、供給、費用、市場取引、資源配分などのミクロ経済学の概念、GDP(国内総生産)、消費、投資、政府支出、政府債務、失業、インフレなどのマクロ経済学の概念について講義する。	
	経営学基礎	当該講義科目は経営学の入門的科目である。この科目の目標としては、経営学学習の導入部分であるので、「経営学とは何か?」を理解することに焦点を当てて講義する。具体的には、「企業(組織)とは何か?」「企業の存続・成長とはどういうことか?」「企業の競争はどのように行われているのか?」「企業従業員はなぜ働くのか?」といった経営学の中の、戦略論と組織論の概論的講義である。これにより、経営学の概観を理解してもらう。	
	簿記基礎	複式簿記は、15世紀末にイタリアの商人によって開発され、ヨーロッパ大陸からイギリス、そしてアメリカ大陸へと伝わり、その後、日本、中国など世界中に広がった。簿記は「ビジネスの言語」とも言われ、グローバル経済におけるビジネスの「共通語」として欠かせない存在となっている。本講義の目的は、簿記の基本的な仕組みを理解し、簿記入門レベル(日商簿記3級)をマスターすることにある。記帳システムでもある簿記の学習には、原理を理解することのみならず、記帳練習が不可欠である。講義では、基本原理の説明にとどまらず、豊富な記帳練習を行うことによって、複式簿記の基本的な仕組みを習得してもらう。	
	会計学基礎	会計はビジネスの言語であると言われる。特に財務会計は、企業が会計情報をつかいて作成・公表するかという立場と、外部利用者がいかに利用するかという立場の双方から学習することができる。本講義では外部利用者の立場から、企業の作成する財務報告の理解を深めるために、財務報告の必要性、利用方法、そして財務会計の基礎構造に関して学ぶ。授業形式は、講義を中心に行う。成績評価は、定期的な課題、小テスト、レポートを基礎として行う。	

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際基礎科目 第2類 (基礎的科目)	日本経済基礎	本講義の目的は、少子高齢化と経済のグローバル化に直面する日本経済の課題や政策的対応に関する知識を習得し、関連する経済理論等に関心を向け、これを理解することにある。日本経済新聞の記事や経済財政白書を始めとする各種白書の章節を題材として用い、国と地方の双方の視点から講義を行う。本講義を通じて、受講生は日本経済新聞や各種白書から主体的に情報を収集する習慣を身に付けるとともに、経済学を身近なツールとして認識する。	
	企業倫理	企業不祥事の増加傾向から企業の社会的責任(CSR)が問われている。このような問題が起きると、これまで長年構築してきたその企業の信頼やブランドは、一瞬にして崩壊し、想像を絶するダメージを被ってしまう。そこで、この授業では学術的な側面から企業倫理の重要性を説明した上で、ケーススタディやディスカッションを行う。 (Martin Collick 兼任講師) 学術的な側面から企業倫理の定義と意義、企業倫理の重要性を説明する。 (石田 寛 兼担准教授) 自らのビジネス経験を踏まえて、ケーススタディやディスカッションを通じてモラルセンスの重要性を気づくよう授業を進めていく。	共同担当
	コンピュータ演習	本講座では、パソコンソフトウェア利用の基礎的な能力を養成する。具体的にはワープロ(ワード)、表計算(エクセル)、データベース(アクセス)、プレゼンテーションツール(パワーポイント)の機能について、演習を通じて学ぶ。単なる能力習得のための課題をこなすだけではなく、国際学部の諸問題に応じた具体的な題材をもとに、基礎的な能力が養成できるように演習していく。授業評価は、演習結果、レポートなどを基礎とした平常評価を主として行う。	
	Introductory Economics	本講義の目的は、英語を用いて経済学の基礎を平易に説明し、経済学の基本的考え方を解説することである。講義する内容は、まず経済学とは何か、市場とは何か、科学としての経済学について、ミクロ経済学とマクロ経済学の違い、経済学的な考え方を解説し、取引と貿易、需要・供給と価格、需要・供給分析の応用、不完全市場入門、公共部門、マクロ経済学と完全雇用、経済成長、失業とマクロ経済学、インフレーションとデフレーションなどのテーマについて講義する。	授業は英語で行う。
	Japanese Economy	本講義は、受講生が海外において日本経済に関する発表等を担えるだけの基礎的な知識を習得すべく、英語により実施する。今日的な課題や現状について論じた後、戦後の日本経済の歩みを取り上げ、さらには明治維新以降の産業化の歴史を振り返る。本講義を通じて、受講生は英語で行われる授業に慣れ親しむとともに、外国人に対して今日の日本経済及び日本の経済発展史に関する報告を行うための資料を英語で作成する能力を養う。	授業は英語で行う。
	Business Ethics	企業不祥事の増加傾向から企業の社会的責任(CSR)が問われている。このような問題が起きると、これまで長年構築してきたその企業の信頼やブランドは、一瞬にして崩壊し、想像を絶するダメージを被ってしまう。そこで、この授業では学術的な側面から企業倫理の重要性を説明した上で、ケーススタディやディスカッションを行う。 (Martin Collick 兼任講師) 学術的な側面から企業倫理の定義と意義、企業倫理の重要性を説明する。 (石田 寛 兼担准教授) 自らのビジネス経験を踏まえて、ケーススタディやディスカッションを通じてモラルセンスの重要性を気づいてもらえるように授業を進めていく。	共同担当 授業は英語で行う。
	Introduction to Financial Accounting	会計はビジネスの言語であると言われる。特に財務会計は、企業が会計情報をいかに作成・公表するかという立場と、外部利用者がいかに利用するかという立場の双方から学習することができる。本講義では外部利用者の立場から、企業の作成する財務報告の理解を深めるために、財務報告の必要性、利用方法、そして財務会計の基礎構造に関して学ぶ。授業形式は、講義を中心に、ケーススタディを用いた討論形式も採用する。成績評価は、定期的な課題、小テスト、レポートを基礎として行う。	授業は英語で行う。

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際基礎科目 第3類 (基礎演習科目)	基礎演習A	大学における学びの基礎として、文献検索、ディベート、問題発見・問題解決の手法を、各講義担当者の専門性を通じて学ぶ。少人数による演習形式で行う。本学部の専門領域は、文化・言語領域、社会・ガバナンス領域、経済・経営領域の3分野に分かれており、対象地域もアジアと北米に分かれているが、本授業では共通の学びの基礎に焦点を合わせて演習を行う。成績評価は、小テスト、レポートなどを基礎とした平常評価を主として行う。	
	基礎演習B	大学における学びの基礎として、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッションの手法を、各講義担当者の専門性を通じて学ぶ。少人数による演習形式で行う。本学部の専門領域は、文化・言語領域、社会・ガバナンス領域、経済・経営領域の3分野に分かれており、対象地域もアジアと北米に分かれているが、本授業では共通の学びの基礎に焦点を合わせて演習を行う。成績評価は、小テスト、レポートなどを基礎とした平常評価を主として行う。	
	Basic Seminar A	大学における学びの基礎として、文献検索、ディベート、問題発見・問題解決の手法を、各講義担当者の専門性を通じて学ぶ。少人数による演習形式で行う。本学部の専門領域は、文化・言語領域、社会・ガバナンス領域、経済・経営領域の3分野に分かれており、対象地域もアジアと北米に分かれているが、本授業では共通の学びの基礎に焦点を合わせて演習を行う。成績評価は、小テスト、レポートなどを基礎とした平常評価を主として行う。	授業は英語で行う。
	Basic Seminar B	大学における学びの基礎として、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッションの手法を、各講義担当者の専門性を通じて学ぶ。少人数による演習形式で行う。本学部の専門領域は、文化・言語領域、社会・ガバナンス領域、経済・経営領域の3分野に分かれており、対象地域もアジアと北米に分かれているが、本授業では共通の学びの基礎に焦点を合わせて演習を行う。成績評価は、小テスト、レポートなどを基礎とした平常評価を主として行う。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際 専門 科目	共通科目 キリスト教と世界	本講義の目的は、キリスト教の社会的使命という視点から、世界規模で起こっている現代社会の様々な問題を見ていくことである。講義の方向性としては、キリスト教に限らず、混迷する世界を前に、宗教が問題解決のためにどのような役割が果たせるのか、また、その役割の問題性と可能性は何なのであるのかを探っていくことである。扱うテーマとしては、戦争や民族間紛争、環境、人権、貧困、平和問題などを取り上げる。授業形態は講師による講義とドキュメンタリーフィルム等を通してのプレゼンテーションとディスカッションを主としながら、学生たちの発表も行う。	
	グローバル化と文化	経済を中心とするグローバル化の進展は、情報や流通の全地球的な規模での拡大と加速を伴う現象である。情報の量と速度が飛躍的に増加し、これまでであった様々な壁が融解したことは、地域間、また人と人との交流にとって大きなメリットをもたらした。しかし一方でそれは、ある国や地域(あるいは民族)に伝えられてきた固有の生活様式や文化の画一化をもたらしている。そのため、グローバル化に対抗する運動もある。講義ではEUやアジアの例を具体的に検証しながら、グローバル化という現象に私たち自身がどう対処していくべきかも考えていく。	
	表象文化論	「表象」とは、人間が自己や他者や世界を、感覚や媒体(メディア)を通じてイメージする行為や、それを通じて生み出されたものをさす。絵画や写真がその代表だが、言語や音楽、文学作品、さらに広告やスポーツイベントも「表象」の産物ととらえることができる。この講義では、おもに視覚的な素材(絵画、写真、映画、広告、コミックなど)をもとにして、われわれが他者をイメージする際の約束事、先入観、ステレオタイプ、文化的枠組みといったものを検証する。	
	文化越境論	多文化共生が模索される現代にあつて、異文化間に存在する境界の克服は大きな課題である。本科目では、いわゆる「近代化」の過程において、国家、言語、教育、ジェンダーなど、文化を構成する諸要素が定義され、自他を区別する境界が明確に設定された歴史を認識し、文化越境への視野を開くことを目標とする。授業は講義形態で実施し、近代における文化越境の先駆的な事例として、孫文、南方熊楠などを取り上げ、彼らの事績を歴史的に分析する。	
	多文化共生論	今日、異文化理解の重要性が叫ばれるが、これは口で言うほど簡単なものではない。これまで培ってきた生活風習やものの考え方が違う人々が会おうなかで、理解できることがある一方で、なかなか理解されないこともある。本講義では、アジアやアフリカなど、日本人にはあまりなじみのない地域に暮らす人々の文化を紹介することで、彼らの社会がグローバル化のなかでいかに変容しつつあるのかを紹介する。また、同時にそれらの人々が国境を越え、異なる地域の人々といかに関係するかを検討することで、異文化の共存にはどのような方法が可能なかを考える。	
	グローバル化と言語	地球規模でヒトやモノが動くグローバル化時代と言われる現代にあつて、権力や富の一極化が懸念されているが、言語についても同様である。それは、「世界共通語」と称される英語の世界標準規格化への懸念である。世界には把握されているもので6,900強の言語があるとされているが、今世紀末にはその半分以上が消滅するとの試算もある。言語を死に至らしめる要因にはさまざまなものがあるが、この英語の勢力拡大もその1つに数えられる。本講義では、グローバル化が世界の言語地図にもたらす影響を英語を切り口に概観する。	
	バイリンガリズム	世界的規模で人の移動がこれまで以上に激しくなった近年、世界の人口の半数以上はバイリンガル・マルチリンガル(複数の言語能力を持ち、それらを用いる人)と言われるが、彼らはどのようにそれらの言語を習得し、使用しているのか。モノリンガル(1つの言語のみを習得する人)のそれとどのように異なっているのか。本講義では、幼い頃から2つの言語を同時に習得するバイリンガルに焦点を絞り、その言語の発達過程や使用の状況を、言語学、心理言語学、社会言語学などの視点から概説する。	
	異文化間コミュニケーション論	異文化間・異言語間のコミュニケーションの手段としての通訳・翻訳を考える。今日、諸国・地域間の交流は政府・民間を問わず様々な分野において盛んになってきており、そのような場面で不可欠な通訳・翻訳は、極めて専門的な作業である。授業では、通訳・翻訳の種類やメカニズム、関連理論、求められる知識などについて、実例を織り交ぜながら概観的にみていく。さらに、同時通訳・逐次通訳の実際の訓練法などを紹介し、受講者が直接、実践的な経験をすることによって、講義内容に対する理解を深めていく。	
Religions in Japan	本講義では日本に見られる複数の宗教伝統の歴史と現状を概説するのが目的である。本講義は時代別とテーマ別の二部構成となっており、歴史資料と社会・人類学的文献を用い日本の主たる宗教伝統について学ぶ。学際的なアプローチを取り入れ、ジェンダー、階級、政治、芸文などの視座から教義、教派、儀礼、宇宙観、世俗化、原理化、リバイバル運動について考察する。なかでも、19世紀以来近代化の衝撃の中で日本の宗教はどのように変化したかという問題に焦点を当てる。教材は主に英文で、必要に応じて日本語の補助教材を用いる。	授業は英語で行う。	

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際学部国際学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
国際 専 門 科 目	共通科目	Intercultural Understanding	グローバリゼーションの進展とともに、人・モノ・情報などの国境を越えた流動性はますます増加し、日常的に異文化に接する機会は増えている。このような今日の社会的状況において、異文化を理解し、それを通して自らの文化を相対的に捉える視野の広さは、ますます重要性を増している。本講義では、社会学および文化人類学の文化研究に関する視点や理論を基本に、旅行やメディアなど身近に接する異文化との出会いに関する具体例の研究を行いながら国際的な視野の育成を図る。	授業は英語で行う。
		Contemporary Multicultural Societies	グローバリゼーションという大きなコンテキストにおける、多文化社会について考察する。まず、グローバリゼーションの諸相を学び、次に、主に英語圏と日本国内における多文化主義と多文化社会の関係について、理念的かつ具体的に検討する。受講生は、これまでの多文化社会構築への試みについて批判的に考察した後、その課題と展望を自らのコンテキストで分析し、相互に検討することを通じて、この問題への有効なアプローチを探る。	授業は英語で行う。
		Modern Japanese Novels in English Translation	主に若い読者層に人気がある現代小説や、広い読者層を持ち、高い評価を受けている現代以前の作品を紹介する。それらの作品は、たとえ翻訳版であったとしても楽しんで読むことができる。作品の背景と近代日本の社会変化を研究することによって、それぞれの作品をより深く理解することが可能になるであろう。以下の流れで授業を進める。1. 近現代小説の概略紹介、2. 夏目漱石『こころ』、3. 村上春樹『羊をめぐる冒険』、4. 吉本ばなな『キッチン』、5. 谷崎潤一郎『細雪』	授業は英語で行う。
		Japanese Poetry	多くのオリジナル日本詩歌、ローマ字読み、翻訳を用いて、日本で1400年以上の歴史を持つ日本詩歌の主要な形式について、概説する。取り上げる内容は次のとおり。日本詩歌の主要素への導入と日本詩歌の美学、万葉集と古事記への導入、万葉集のさらなる研究、万葉集における恋愛歌、小倉百人一首への導入、小倉百人一首のさらなる研究、松尾芭蕉への導入とその美学、松尾芭蕉のさらなる研究(受講者は作品のいくつかを翻訳)、与謝蕪村・小林一茶・正岡子規への導入、20世紀詩歌への導入、川柳への導入、与謝野晶子ほか女流詩人への導入、現代詩歌概説。	授業は英語で行う。
		Japanese Art A	この授業では、古代から16世紀中ごろまでの日本の視覚芸術について概観する。取り上げる内容は次のとおり。縄文土器、弥生土器と青銅器／古墳と土偶、飛鳥時代：仏教の導入、奈良時代初期：彫刻、奈良時代後期：彫刻、フィールドトリップ：奈良、平安時代初期、平安時代後期：彫刻と絵画、鎌倉時代：彫刻と絵画、室町時代：墨絵、書道研究会、桃山時代：絵画。	授業は英語で行う。
		Japanese Art B	この授業では、16世紀から近代までの日本の視覚芸術について概観する。取り上げる内容は次のとおり。桃山時代／江戸時代：二条城とその庭園、日本の城、フィールドトリップ：姫路城、庭園、茶道：美学と哲学、江戸時代：琳派、江戸時代：四条派／南画派、いけばな研修会、浮世絵、漆器、陶磁器、日本画：伝統様式における近代の作品。	授業は英語で行う。
		Traditional Japanese Theatre	この授業の目的は、受講者に日本の伝統演劇の様式や、日本の歴史、文学、社会の中において日本の伝統演劇がどのような位置にあったのかについて、徹底した導入を与えることである。主に、有名な演劇である歌舞伎と、人形劇である文楽に焦点が置かれる。全世界的に関連性のある舞台芸術として、また日本独自の文化的気風の代表として、伝統的なジャンルの理解を育てることを目標とする。取り上げる内容は次のとおり。日本演劇への導入、能と狂言、文楽美術とテキスト、文楽の心中、20世紀文楽、演劇と社会。	授業は英語で行う。
		Japanese Cinema	この授業は、近代性と伝統のユニークな混成である古典日本映画の稀有な特徴を考察する。無声映画から1950年台の日本映画黄金時代へ移り変わる社会的な文脈を背景にした日本映画の発展について検証していく。授業で扱うテーマは、映画の古典的な美意識であり、ヒューマニズムとリアリズム、西欧からの影響、女性像の変化、社会批判、プロパガンダと検閲、日本映画の偉大なるディレクターたちについてである。以下の流れで授業を行う。映画の起源、初期の映画、初期現代映画、文芸映画、戦争、占領。	授業は英語で行う。
		The Geography of Japan A	この授業では、地理と歴史の総合的な側面から日本の風景の進化の足跡をたどる。はじめに、日本の地形、気候、自然災害など、主要な自然科学的地理を重点的に学ぶ。授業の大半は、太古の昔から人間が日本の風景に与えてきた影響について焦点を当てる。都市風景の形態について特に重視し、特に17世紀の城下町と、明治時代とそれ以後に起こった都市風景の変化について焦点を当てる。また、日本の地方の風景における現在の変化についても注目し、これらが日本の社会と文化の形成において果たしてきた役割について検討する。	授業は英語で行う。
		The Geography of Japan B	日本の景観は、現在、急速かつ劇的な変化を遂げている。そして、このような変化は何らかの形で日本社会の伝統的な秩序バランスを崩してきたと考えられ、このバランス崩壊の原因として考えられるものを特定し、理解することがこの授業の目的である。この授業では、特に日本の人口構造の不均衡(高齢化問題)や人口分布の不均衡(地方の過疎化と都市部の人口過密化)を含む、現代の日本の人口統計学データ上の問題に焦点を当てる。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	Japanese Psychology	この授業では、日本の文化や社会制度に関連する心理学の研究が紹介される。主に、子どもの発達に焦点が当てられ、日本のメディア、学校教育、家族制度、学校生活などを含む、子どもの発達に影響を及ぼすさまざまな要因を議論する。心理学の観点から日本人を理解することを目標とする。以下の流れで授業を行う。概説、子どもの発育とメディア、認知的発達と日本の学校教育、日本の家族制度と子どもの発育に及ぼす効果、日本の学校における仲間関係と適応、研究課題。	授業は英語で行う。
	Japanese History A	1853年から1973年までの日本の歴史を地域的、国家的、国際的視点から探求する。授業では、特に社会史、政治史を重点的に学ぶ。文献講読や個別研究にもとづいて、歴史と歴史資料について議論する。授業は学生個人の積極的な授業への参加によって行われる。以下の流れで授業を行う。明治時代以前の日本(1850-1868)、明治維新、明治時代—女性の地位、大正時代—帝国建設、軍国主義と戦争—南京大虐殺、再建と戦後の日本。	授業は英語で行う。
	Japanese History B	以下の3点を目的とした授業を行う。1. 日本の前近代史の概観、2. 歴史資料の重要性の理解、3. 上記1. 2. によって学んだことを、クラスで学生がプレゼンテーションやディスカッションを行う際に利用する。授業では、特に経済と社会の歴史について重点を置く。以下の流れで授業を行う。大化以前の日本、大化の改新、平安京遷都、平安構造の減退、「中世」政治経済構造、「中世」文化、戦国時代と天下統一、西暦1500年～1700年にかけてのアジアとヨーロッパの関係、江戸の政治構造、江戸の社会構造、江戸の文化、西洋の到来(1840-1873年)。	授業は英語で行う。
	Religious and Traditional Rites	この授業では、宗教的な祭りを事例として、その歴史と目的について概説する。取り上げる内容は次のとおり。祇園祭、お盆、日本の伝統格闘技:相撲、日本の伝統的結婚式、収穫祭、日本の新年:お正月、春への季節変化:節分、桃の節句、火と水の祭り:お水取り、端午の節句、だんじり祭り:岡本だんじり。	授業は英語で行う。
	日本の政治と外交	現代日本政治における立法・行政の諸制度、政治的アクター、政策形成過程、選挙・投票行動、政治参加等の特質について、主として政治社会学的視点から講ずるとともに、情報社会化の進展による日本政治の変化について講ずる。また、日本外交については、内政と外交のリンケージ、対米関係と国際協調の両立という視点を重視しながらその特質について論じ、併せて外交の基本姿勢となる「世界における日本の役割」に関する議論についてその分析軸を提示したうえで、日本外交に関する鳥瞰的視座を提示する。	隔年開講
	日本国憲法	本講義は、憲法の歴史や憲法の制度の趣旨・目的・機能に関する諸々の学説を比較検討することを通して、様々な現実の憲法問題に対して、一定の判断を下せるような法的思考力を養うことを目標とする。講義では、基本的人権と統治機構を中心に、民主主義の原理、平和主義、法の下での平等、自由権、国務請求権・参政権、社会権、権力分立、国会、内閣、裁判所、財政、地方自治、憲法の保障などに関する日本国憲法の重要な論点の理解を深め、受講生が憲法の考え方を応用・実践できるような思考様式を習得することを目指すこととする。	
	現代国際法	入門的な国際法の講義をふまえて、特に各論的な国際法について講義する。内容としては、領域と境界面定などの陸の国際法、海洋法条約などの海の国際法、領空や宇宙空間などに関する国際法、国籍や人権の国際的保障など個人と国際法、国際刑事裁判所と法、貿易や投資に関する国際経済法、地球環境などに関する国際環境法、武力行使と国際法、核兵器不拡散条約などの軍縮に関する国際法、害敵手段の規制や紛争犠牲者の保護に関する国際人道法、国際法と今日的課題などを取り上げる。	隔年開講
	国際政治経済論	①安全保障、経済的利害、価値観、国内利益集団への配慮、などの制約要因に縛られながら、国家がどのような対外関係を構築してきたか、歴史的事例を使って概観する。②産業の利益擁護を巡って、通商摩擦が先進国間、先進国と途上国間で起こった例を、それぞれケーススタディーとして取り上げ、政治と通商交渉の関係を浮き彫りにする。③国内競争力の強弱によって、一国の通商哲学が保護貿易、自由貿易、相互主義貿易に変遷していく様を、事例を使って概説する。また、サービスなどの分野で、自国の優位性を確保するため、グローバルなルール設定競争が激化している状況を分析する。出来るだけケーススタディーを使用しながら、授業を進める。	
	国際制度論	国際社会の組織化に加え、国際協力達成の目的で設置されている国際的な制度について講義する。内容としては、平和及び軍縮のための国際制度(国際連合、ジュネーブ軍縮会議など)、主として安全保障のための地域的な制度(北大西洋条約機構など)、貿易に関する国際制度(世界貿易機関や地域的な制度)、人権に関する国際制度(人権理事会や地域的人権条約に基づく機関など)、国際協力に関する制度(特に開発援助関連の制度)、先進国を対象にしたOECDやサミット、などを取り上げる。	隔年開講

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	グローバル・ガバナンス論	グローバル化の進行に伴って生ずる諸問題は市場メカニズムや国家間の協力関係だけでは容易に解決できない、という現代世界の様相を踏まえて台頭した「グローバル・ガバナンス」という考え方について、国際社会の歴史的趨勢及び国際関係理論の展開等を踏まえて講ずる。さらにこうした基礎的理解をもとに、国際テロリズム、地球環境問題、インターネット・コミュニティ等の具体的諸問題に沿って、国境を越える問題の統御に関する視座・論点について講ずる。	隔年開講
	ヨーロッパ国際関係史	現在、ヨーロッパではEUの政治統合が深化し、NATOは東方に拡大し、国際政治におけるヨーロッパの影響力は増している。本講義では、主に第一次世界大戦前のヨーロッパの国際関係から、冷戦期及び冷戦後のヨーロッパ統合及びNATOの役割を歴史的に跡付ける。とりわけ、ヨーロッパ統合という主権国家を超越しようとした困難な外交プロセスは、どのように進められてきたのか、という問題に焦点を合わせて、ヨーロッパ統合の可能性と限界に焦点を合わせる。同時に、今日のヨーロッパの課題と今後の国際秩序に関する考察を行う。	隔年開講
	国際ガバナンス事情	本講義では、まずリアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムなどの国際政治学理論を概観する。そのうえで、こうした国際政治学理論を用いつつ、安全保障分野、地球環境分野、国際経済分野、開発分野などの各分野におけるグローバル・ガバナンスの実態について、分析を進めていく。理論的な視点を持ちつつ、具体的な事例の学習を通してさまざまな分野における国際ガバナンスの実態について理解を深めること、それが本講義の目的である。	隔年開講
	国際ジャーナリズム論	米国発の金融危機が世界経済を混乱に陥れたり、中国の汚染食品が日本の食の安全を脅かししたりするなど、グローバル化に伴い、海外ニュースは身近なものになっている。国際報道の重要性は高まる一方で、事実を一刻でも早く伝えるだけでなく、迫力あるルポや写真、的確な見通しの分析や解説も求められている。授業では、講師自身の新聞社での特派員経験を生かし、実際の現場ではどのように取材活動が行われているのか説明しながら、国際ジャーナリズムはどうあるべきか、受講者とともに考察する。	
	北米とアジアの地理	世界を理解するためには地理的知識が不可欠である。本講義では、北米とアジアを理解するための基礎として、両地域に関する地理的知識を習得することを第一の目標とする。その際、地図の利用法や提示の仕方などについても指導する。そのうえで、さらに一歩進んで北米とアジアを文化地理学的な視点から理解することを第二の目標とする。そのために、両地域について文化特性に基づく地域区分を行い、設定された文化地域の構造を把握することを試みる。	隔年開講
	比較対外関係論	カナダ、日本、その他の対米同盟国や友好国を中心とした対米政策の比較を行う。冷戦終了後、唯一の超大国として残った米国の意外な脆弱性にもスポットライトを当てるとともに、外交政策理論による分析も実施したい。特に、現実主義的国際関係理論や政策決定過程論(アリンモデルなど)を組上に載せ、米国の同盟・友好国による対米紛争過程や結果などの理解を深める。総合国力面では圧倒的に不利な状況にある対米弱小国が、どのようにして、米国とは異なる政策を貫徹し、時には米国を動かしてきたのかを理論的・実証的に検証していく。	
	Global Governance	本講義では、安全保障分野、地球環境分野、国際経済分野、開発分野などの各分野におけるグローバル・ガバナンスの実態について見ていく。その際、単に各分野のガバナンスの実態を見るのではなく、リアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムなどの国際政治学理論を用いて、そのガバナンスの実態分析を行う。国際政治学理論を用いつつ、具体的な事例の学習を通してさまざまな分野における国際ガバナンスの実態について理解を深めることが本講義の目的である。	隔年開講 授業は英語で行う。
	International Relations in Europe	現在、ヨーロッパではEUの政治統合が深化し、NATOは東方に拡大し、国際政治におけるヨーロッパの影響力は増している。本講義では、主に第一次世界大戦前のヨーロッパの国際関係から、冷戦期及び冷戦後のヨーロッパ統合及びNATOの役割を歴史的に跡付ける。とりわけ、ヨーロッパ統合という主権国家を超越しようとした困難な外交プロセスは、どのように進められてきたのか、という問題に焦点を合わせて、ヨーロッパ統合の可能性と限界に焦点を合わせる。同時に、今日のヨーロッパの課題と今後の国際秩序に関する考察を行う。	隔年開講 授業は英語で行う。
Japanese Society	この授業では、現代日本の社会と文化についてバランスよく理解することを目的としている。一般的な社会学的枠組みの中で説明を行うが、社会学理論についての知識を持ち合わせていなくてもよい。授業では、日本人のアイデンティティや日本社会の独自性、またどのように日本社会が変わったのか、そして変わりつつあるのかということについて説明する。さらに、家族、仕事、余暇、階級、教育、社会の分裂や統合など、特定の重要分野を検証する。	授業は英語で行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	共通科目 Special Topics in Japanese Society	一般に、日本の社会は同質社会であるとイメージされたり認知されたりする。いったい何が人々をこのように思わせるよう導いたのか？有名な理論である「単一民族論」が一般にその論理的証拠に引き出されるが、それは歴史的に不十分な回答であり、単一民族論は第二次世界大戦後に出た理論である。この授業では、アイヌの人々、部落民、沖縄人、そして在日の韓国人・台湾人・中国人等、「マイノリティー」の歴史的視点を通して日本の「向こう側」を検証する。また、このような人々の基礎的な歴史背景や、現在抱えている問題や苦心を学ぶことを目標とする。	授業は英語で行う。
	Government and Politics in Japan	日本は民主主義国家であるが、歴史、社会、外交関係は日本の政治に独特な影響を及ぼす。この授業では、受講者に日本の政治や外交関係についての知識を与え、理解を深めるとともに、最終的には日本が今日直面する主要な政治問題に関して、学生独自の考えを発展させることを目標とする。パート1:日本の戦後史-占領と冷戦(戦前の日本と太平洋戦争での敗北、占領と民主主義国家としての再建、占領と冷戦の中での再建)、パート2:民主主義国家としての政治と政策(戦後日本の政治の流れと現代の党派政治、政治システムの特徴、地方政府系機関への訪問)、パート3:国際政治の中での日本(冷戦後の日本による国際的貢献、安全保障政策への挑戦、日本の対外関係の中での戦争の遺物、政策分析)	授業は英語で行う。
	Japanese Legal System	この授業では、社会学、法学の視点から日本の法制度の機能について分析し、説明する。まずはじめに、日本の法文化について紹介し、その後、法と社会思想と日本の法秩序の関係について考える。集団の性質と役割、社会における個人の位置、正義の概念、ジェンダーの役割、紛争解決のパターン、法制度の文化的基礎といった問題を、現代の制度の枠組みの中で検討する。特に、個人と法制度の相互関係について、日本では個人の基本的権利に関する紛争においてどのように機能するのかしないのか、という点に重点を置く。	授業は英語で行う。
	Japan's Foreign Relations	この授業は、日本の外交政策についての入門コースである。授業の主な焦点は、防衛政策、特にアメリカとの安全保障関係に当てられる。日本国憲法の中でも、特に世界の中での日本の行為に大きく影響を及ぼしてきた憲法第9条について、詳細な論議をする。取り上げる内容は次のとおり。世界秩序の歴史概説(国民国家、中国、イスラム、日本)、国内政治組織、憲法、憲法改正議論、米国との安全保障関係、日本と国連、核政策、中国や韓国との関係。	授業は英語で行う。
	Political Economy of Japan	この授業では、パート1で、戦後日本の経済成長について説明し、また、1990年代以後、何が間違いなのかもしくは何を間違えたのかということについて議論する。パート2では、日本の公共政策について説明する。政治家が果たした良かれ悪しかれの役割に主眼が置かれる。パート1:政治経済(文化、イデオロギー、日本政治の有力な説明、国家か市場か、日本企業、日本の労働者、何が間違いなのか、もしくは何を間違えたのか)、パート2:公共政策(一般的な公共政策、地方自治におけるの公共政策、政治的統合<女性と少数派>、政治的統合<小企業と組合労働者>、政治の改革もしくは何を間違えたのか)	授業は英語で行う。
	国際企業経営論	市場のグローバル化とEU(欧州連合)を初め、NAFTA(北米自由貿易協定)、AFTA(アジア自由貿易協定)の地域経済統合の促進に伴い、大企業のみならず中小企業も益々国際化し、販売流通、生産、部品購入、そして研究開発などあらゆる企業活動を国際規模で拡大しなければならない。こうした加速する経済のグローバル化は国際企業となる企業経営全体だけでなく、個々の企業経営者および従業員にも国内企業経営と比較できないほどの大きな要求をもたらしている。本講義は多国籍企業が直面している国際経営と経営管理方式、組織構造、研究開発、知的財産管理、M&A、海外直接投資、サプライ・チェーン・マネジメント、異文化コミュニケーションなどに関する課題を理論的に実例をも利用し、分かり易く解説する。	
	統計学	統計学とは、一見無秩序に見えるデータからある規則性を見出すために概念や手法を考える学問である。本講義では、記述統計と呼ばれるデータそのものの特徴を捉えることを目的とした分野に関するいくつかの事項を解説する。講義テーマは、シグマの計算、度数分布表とヒストグラム、ローレンツ曲線とジニ係数、標本平均・分散・標準偏差・変動係数、相関係数と回帰分析、事象と確率などである。また、授業ではパソコンを使った統計分析の紹介も行う。	
	経済学A	経済学の入門コースを履修した学生を対象に、ミクロ経済学(消費者・企業・市場の分析)を現実への応用を重視しつつ講義する。内容は消費者の行動と需要曲線、企業の行動と供給曲線、市場メカニズムの効率性、市場の失敗・政府の失敗、などを含むが、環境問題、独占禁止政策、公企業、規制緩和についても政治経済学的視点から考察する。市場メカニズムの重要性と限界、政府による政策の必要性と問題点を学んで、政策分析能力を身につけることを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際 専 門 科 目	共通科目 経済学B	標準的な国際経済学の基礎を学びつつ、グローバル経済のメカニズムを探究する。国際経済システムは、技術進歩と経済成長を通じてますますその相互依存関係を緊密化させている。緊密化は貿易・資本フロー・労働・知識・技術などの移動によって起こるが、その担い手となるのは主として民間企業・金融機関であり、これら民間企業活動の国際化は各国経済政策と国際経済システムに複雑な影響を与える。ここでは、相互依存緊密化のダイナミズムを明らかにするとともに、それによって生じる国内および国際政策課題への取組を考察する。	
	経営学A	当該講義科目は経営学の中の戦略論に焦点を当てて講義する。これには企業戦略論と競争戦略論の二つの領域が存在するが、本講義では主として競争戦略論が主要なテーマとなる。中でも、「企業はいかにして競争するか?」「競争の手段には何があるか?」「他社より優れた競争優位性とは何か?」「競争優位性の持続性とは何か?」といったことを明らかにする。これにより、現実起こっている、企業間競争の実際を理解することができることが、目標となる。	
	経営学B	当該講義科目は経営学の中の戦略論に焦点を当てて講義する。これには企業戦略論と競争戦略論の二つの領域が存在するが、本講義では主として企業戦略論が主要なテーマとなる。中でも、「企業が合併するのはなぜか?」「企業が戦略提携をする場合の問題は何か?」「なぜ企業は国際化するのか?」「企業はなぜ製品多角化をすすめるのか?」といったことを明らかにする。これにより、現実起こっている企業の成長の方式を理解できるようになることが目標となる。	
	国際会計論	ヒト・モノ・カネの移動が国境を越えて行われている経済活動の国際化の中で、会計基準の各国間の差異を解決しようとする試みも行われている。本講義ではそれらの相違の背景に関する経済的な分析を試みる。具体的には会計における基準設定の役割、基準設定の経済的・政治的問題、会計情報の外部的影響に関する理解を深めるための理論的背景(意思決定有用性、情報の非対称性、実証会計理論など)を学ぶ。授業形式は講義を中心に、対話型授業も行う。成績評価は、定期的な課題、小テスト、レポートを基礎として行う。	
	財務報告および企業分析	本講義では、アジア企業および北米企業の財務報告を用いて、外部利用者の立場から企業分析および評価を行う方法を学ぶ。具体的には、投資および企業評価方法のフレームワーク、企業を取り巻く環境に関する分析、財務諸表分析手法、といったことに関する理解を深める。証券投資・企業買収など様々な目的のために分析が行われるため、投資におけるリスク・リターンに関しても学ぶ。授業形式は、講義と対話型授業を中心に行う。成績評価は、ケース発表、小テスト、レポートを基礎として行う。	
	国際マーケティング論	伝統的な国際マーケティングと対比してグローバル・マーケティングならではの特徴を戦略特性分析により明らかにすることを目標とする。新興市場国系企業の成長を考慮に入れた世界企業間の国際戦略提携関係の変化、M&Aの選択ルール、グローバル・デファクト・スタンダード競争、インターネット普及に伴うマーケティング手法の革新、サプライ・チェーン・マネジメント、製品のモジュール化とインテグラル化など、比較的新しい事象を取り上げ、従来型の国際マーケティングの理論や分析手法で果たして説明可能かどうか、を吟味する。業界、製品市場、企業、国別市場を分析単位として洞察する。	隔年開講
	国際移民論	「国際的な人の移動」の規模は世界的にも拡大しており、移動した人々は社会経済的に大きな役割を果たし、同時に多くの地域的課題を生み出している。本講義では「国際学入門」の授業を踏まえ、主に我が国における外国人在留者の実態、役割、課題について、学際的かつ国際比較的に接近する。最終的には、感情的な議論が散見される外国人労働の受入れ論争に対して、受講生が客観的な意見を有することができるようになることを期待している。	
	環境経済学	本講義では、環境問題への経済学的なアプローチを理解することと、環境問題を当事者として考えるようになることを目標とする。授業計画として、持続可能な社会と環境問題の歴史、世界の環境問題と経済学的なアプローチ、グループワークとプレゼンテーションを3分の1程度ずつ行う。グループワークが実施できない場合は、さまざまな環境政策(廃棄物リサイクル関係)について説明し、討論する。この講義では、受講生の積極的参加を要求する。	
	経営人類学	経営学と人類学を融合させた経営人類学的視点から会社の経営を考察する。具体的には、それぞれの会社の価値観や振る舞い、そこで働く人々の仕事ぶりや生活パターンなど、主として文化的側面について比較し、その普遍性と個別性を検討する。こうした作業を通じて、調査手法としてのフィールドワークの方法を学ぶとともに、会社の経営を文化相対主義的視点で分析する能力を養成する。取り上げる授業内容は以下の通り。経営人類学とは何か、経営人類学の方法、経営人類学の展開、経営人類学の成果、経営人類学の課題。	

授 業 科 目 の 概 要

(国際学部国際学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際 専 門 科 目	共通科目 ヨーロッパの経済と企業	50年以上の経済の統合の深化と拡大を経て、EU(欧州連合)は2009年現在27ヶ国で構成され、その内16ヶ国がヨーロッパの単一通貨ユーロを利用し、途上国の中国とインドを除き、人口約5億人の世界最大の単一市場となった。こうした国境が完全に無くなり、人、財、サービスと資本の自由移動を実現したEUの単一市場は企業経営のあり方に様々な特徴をもたらしてきた。本講義はヨーロッパの代表的な産業である自動車産業を例として、ヨーロッパの経済と企業経営独特のビジネス環境を説明し、欧州自動車産業の構造と特徴、ヨーロッパの自動車グループと各ブランドの発展過程、そしてEU経済の拡大に伴う競争条件の変化と欧州域内企業の対応について、競争戦略論の視点から考察を加え分かり易く解説する。	
	国際観光論	20世紀後半からの世界的な社会現象の一つに、国際観光による人間の移動が地球の規模でスタートしたことがあげられる。受け入れ国のトップは訪仏外国人旅行者約8,000万人のフランスを先頭に、約6,000万人のスペイン、約5,000万人のアメリカと続いている。訪日外国人旅行者数は約730万人と日本は桁違いに少ない。それに対し訪米外国人旅行者からアメリカが受け取る観光収入(観光輸出)額はフランス、スペイン、日本のそれを大幅に上回って大きい。本講義は、国際観光の動向をふまえながらアメリカを中心に上述の3ヶ国などのこうした発展の相違を生み出した自然資源、歴史・文化遺産、さらには文化力を含む観光力そのものに焦点をあてて検討する。	
	経済・経営特別演習	現代の国際社会における企業を取り巻く諸環境は非常に複雑であり、様々な要因がからみあっている。本講義では、そのような諸環境(特に経済的な環境)およびそれに対する企業の対応に関して、実践的な内容を中心に講義を行い分析を試みる。実務的な問題については、企業実務家などをゲストスピーカーに招き、講義担当者との議論を通じて、より理解が深められるようにする。授業評価は、定期的な課題、小テスト、レポートを基礎として行う。	
	International Accounting	近年、経済活動が国際化し、ヒト・モノ・カネの移動が国境を越えて行われている。自然言語が各国で異なるのと同様、会計(基準)に関しても各国間で相違が存在し、それらの相違を解決しようとする試みも行われている。本講義ではそれらの相違の背景に関する経済的な分析を試みる。具体的には会計における基準設定の役割、基準設定の経済的・政治的問題、会計情報の外部的影響に関する理解を深めるための理論的背景(意思決定有用性、情報の非対称性、実証会計理論など)を学ぶ。授業形式は講義を中心に、ケーススタディを用いた討論形式も採用する。成績評価は、定期的な課題、小テスト、レポートを基礎として行う。	授業は英語で行う。
	Financial Reporting and Analysis	本講義では、北米企業の財務報告を用いて、外部利用者の立場から企業分析および評価を行う方法を学ぶ。具体的には、投資および企業評価方法のフレームワーク、企業を取り巻く環境に関する分析、企業評価モデル、財務諸表分析手法、将来性分析、企業の財務政策といったことに関する理解を深める。証券投資・企業買収など様々な目的のために分析が行われるため、投資におけるリスク・リターンに関しても学ぶ。授業形式は、ケーススタディを用いた討論を中心に行う。成績評価は、ケース発表、小テスト、レポートを基礎として行う。	授業は英語で行う。
	Economies and Business Management in Europe	ヨーロッパには、ビジネスや経済において極めて独特な環境が存在する。一方で、企業組織や経営スタイル、地域市場に多大な影響を及ぼす言語や社会、文化の違いがあり、この違いは今後も引き続き存在していくが、他方、50年前に始まったヨーロッパの経済統合のプロセスは、確実に進行し、共通の経済や法、制度を持った単一のヨーロッパ市場として結実してきている。この講義では、ヨーロッパの共通経済政策の主要な分野について学ぶとともに、ヨーロッパの経済統合のプロセスや、EUの法的、制度的な構造について見識を深める。また、事例研究によって、ヨーロッパの具体的な地域経済の性格を学ぶと同時に、日本とは異なった企業経営文化への理解を促す。	授業は英語で行う。
	Japanese Business A : Lecture	この授業の目的は、日本の企業や経営の概要について、歴史的、経済的、社会的な文脈において説明することであり、経済やビジネスに関する背景知識を持たない学生も対象とする。このテーマに関する様々な側面について説明するとともに、「問題点」の存在する分野に特に注目する。授業では、近年の変化が、国内的に、または体外的な世界との関係の両方において、どのような影響を日本に及ぼしているのかについて評価することを試みる。	授業は英語で行う。
	Japanese Business B : Seminar	この授業では、日本の企業と経営の分野における近年の展開や問題点について歴史的、国際的な視点から説明する。日本のビジネスとマネジメントに関するあるいくつかの具体的なトピックを、秋学期開講「Japanese Business A: Lecture」よりもさらに深く検証する。トピックは、産業構造、企業間関係、産業政策、労使関係、金融制度、マーケティングと流通、そして日本の国際貿易とビジネスの関係を含む。受講者は授業内プレゼンテーションにむけてトピックを用意する。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	北米文化論	植民地時代から現代に至るアメリカ合衆国の歩みにみられる文化的流れを、特徴的な社会現象を織り交ぜながら概観する。アメリカ史を念頭に置きつつ、ネイティブアメリカンとヨーロッパ人、ビュリタニズムと自由、独立戦争、南部と北部、奴隷制と女性、西部とフロンティア、南北の対立、南北戦争、都市化と移民、公民権運動、多文化主義といったトピックを扱う。歴史的に重要な文献を英語の原文で学生に解説し、英語読解力の伸張をも合わせてはかりたい。	
	日米比較文化論	明治維新以降、日米文化交流が本格化するなかで、主に日本人がアメリカ社会や文化をどのように理解、吸収しようとしたのかを講義する。主なトピックは、ルース・ベネディクトの日本理解、『米欧回覧実記』とアメリカが与えた衝撃、明治維新とキリスト教、札幌農学校と日本人、内村鑑三と父なるキリスト教信仰、新渡戸稲造と「太平洋の架け橋」、ホイットマンと有島武郎、アメリカと永井荷風、敗戦とアメリカ文学の受容、近代化と漱石の苦悩など。	
	映像・演劇文化論	アメリカ映画を「性」の側から見るとき、そこに何が見えるのか。映画における性表象は多様であり、そこには人種や階級、歴史や政治の問題が潜む。性の考察から見えてくるのは、「文化」の総体である。本講義は、「ジェンダー」「セクシュアリティ」という「性」の側からアメリカ映画を考察し、より深い文化理解へと繋げることを目標とする。授業は講義形式を取り、映像や図版を用いて、視覚的な理解を促す。毎回異なるテーマを提示することで、「アメリカ映画の性／政治学」を多角的に考察できる視座を養う。	
	北米言語文化論	この授業では、北米地域を主な対象とし、言語を研究することでその背景にあるこの地域の歴史、文化、価値観等を学ぶ。それにより、この地域を多角的に理解することをこの授業の目的とする。具体的には、アメリカ合衆国やカナダに特徴的な英語・英語表現を見ることで、そこに現れる建国や移民の歴史、民族性、宗教観、道徳、価値観等に対する理解を深め、ひいては北米地域の理解を目指す。授業はセミナー形式で行われ、講義と並行して受講生による発表を中心に進められる。	
	日米言語文化比較論	アメリカ社会の成り立ちを示すことばや社会の特徴を顕著に示す時事語、日常語などを通じて、アメリカ人の基本的なものの考え方、言語生活を日本社会・日本語を念頭におきながら考える。これにより日米間の言語コミュニケーションに必要な基礎知識の習得を目的とする。具体的にはアメリカ社会の基盤となっている「自由と平等、公平、正義」に関連することば、アングロサクソンが主流の多民族・多文化社会ならではのことは、キリスト教国アメリカにかかわることば、個人主義社会を示すことばなどをとりあげ、講義する。	
	日米交流史	黒船来航以来の日本とアメリカという二つの社会を越境した人々の活動や思想に焦点を当てて、文化・政治・思想をめぐる交流のあり方を探る。講義では、文明開化のなかのアメリカ人、日本人移民の経験したアメリカ、黄禍論と人種主義、日米戦争と日系人の強制収容、占領下の文化変容、高度経済成長と日系アメリカ人、ジャパン・パッシング、グローバル化とクール・ジャパン、等のトピックを取り上げ、江戸末期から現代にかけての日米間の文化交流の変化を議論する。	
	北米の女性とジェンダー	現代アメリカにおいて、女性はめざましい社会進出を果たし、活躍の舞台を広げている。しかしながらアメリカがいつの時代でもそうであったわけではなく、女性たちが「女らしさ」という枠に閉じこめられていた時代もあった。アメリカにおけるジェンダーが時代によってどのように変化してきたか、それをいろいろな時代の女性たちを通して見ていきたい。具体的には、H.B. ストール、K. ショパン、Z.N. ハーストン、G. スタインといった女性作家たち、C.P. ギルマン、E.C. スタントンといった社会運動家、G. オキーフ、M. ウェストといった芸術家、俳優たちなどさまざまなジャンルの女性を扱う予定である。	
	The Media Culture in North America	メディアと文化は、私たちの社会生活において、中心的な位置を占めるようになってきた。メディアは、我々にいかに生きるべきか、何を買うべきか、誰に投票するべきか、どのような女性や男性になるべきか、といったことを伝える有力な機関である。この授業では、メディアの語法、組織、制作上の慣行などについての分析や討論を通して北米のメディア文化を学ぶ。消費や感受能力に焦点をおいた視聴者研究や、市民の権利や義務といった問題についても取り扱う予定である。授業では、民主的なコミュニケーション、文化の帝国主義、代替的メディア、ジャーナリズムの倫理、メディアの検閲問題といったテーマについても扱う予定である。	授業は英語で行う。
	Cultures in the USA	この半期の授業は、学生との対話方式の授業によって、アメリカの文化やアメリカという国家の独自性に貢献してきたものについて紹介する。移民の国として、アメリカにあこがれた移民たちが特性や技術を持ち寄ったという国柄・特徴があったからこそ、アメリカは成功を遂げた。授業で扱うテーマは、移民、アメリカンドリーム、国家のアイデンティティ、同化、人種差別、宗教や、ヨーロッパ系白人文化が支配する文化の国から、多様な人材が作り出す文化の国へと変化してきたアメリカの未来についてなどである。	授業は英語で行う。

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	北米社会論	①米国社会が、かつてはメルティングポット、最近ではサラダボウルと喩えられるように、如何に異質な要素から構成されているかを、人種、宗教観、労働観、カネに対する考え方、などの違いを尺度に究明する。②米国社会の基本潮流は、上述のような異質な社会構成要素の、いわば時々の少数派大連合によって規定される。4年ごとに行われる大統領選挙を素材にしなが、時々の米国社会の方向が何処を向いていたか、何故そうなったか、トレースし、以って、第2次大戦後、現在に至るまでの米国での政治の在り様を紹介する。素材に、時々の世論調査結果を多用する。	
	カナダ社会論	カナダは世界第2位の国土面積をもつ大陸規模の国家であり、世界各地からの移民を受け入れてきた多民族国家でもある。それらの点では日本と大きく異なる一方で、アメリカ合衆国との政治・経済関係をはじめ、日本と共通する部分もある。本講義は、カナダ社会についての理解を深めることを目標とし、アメリカ合衆国との比較を念頭におきながら、自然環境、歴史的背景、諸地域とその特色、都市と農村、過去の移民と現在の移民、二言語・多文化主義、ケベック州の分離・独立問題、日本との関係などについて講義する。	隔年開講
	アメリカの政治	現代アメリカ政治を講義する。まず、アメリカの建国や憲法制定過程を説明し、アメリカ民主政治の基本概念を述べる。続いて、アメリカ政治制度、大統領、議会、選挙、政党と利益団体活動などを講義し、アメリカ政治の基本的仕組みを理解させる。さらに、政策決定過程、中央地方関係といったアメリカの政治過程の特質を講義する。そして2001年9月11日の同時多発テロ以降のアメリカ政治の実態を論じ、アメリカ民主政治の伝統の変容を検討する。	
	アメリカの外交	イラク戦争を敢行したアメリカ外交を、パワー・ポリティクスの権化のように感じた人は多いであろう。だが、ブッシュ前政権をイラク戦争に駆り立てたひとつの要因は、自由民主主義という理念の普及をアメリカの使命とみなす感覚であった。そして、世界一の経済大国であるアメリカは、経済的利益の追求にも貪欲である。アメリカ外交をどのように考えればいいのか。本講義では、アメリカが「大国」への道を歩み始めた19世紀末以降にとくに重点を置いて、アメリカ外交の歴史的展開を解説する。建国以来の歴史に根ざしたアメリカ外交の構成要素を、さまざまな事例を通じて理解することが、本講義の目的である。	隔年開講
	カナダの政治と外交	第二次世界大戦後のカナダにおける政治と外交の基本問題を取り扱う。連邦制度と議院内閣制を柱とするカナダ政治制度やカナダ外交の潮流をカバーし、戦後カナダの内政と外交の諸争点についての理解を深める。特にカナダの歴代首相と連邦総選挙結果に焦点をあてて、カナダがこれまでのどのような政治的・外交的発展を遂げて来たのかを探りたい。カナダについての事前知識が全くない受講生もこの講義を通じて、カナダの政治と外交の概要を理解できるだろう。	隔年開講
	現代日米関係論	日米関係が日本にとってもっとも重要な二国間関係であることは、中国やインドの台頭が著しい今日でも変わらない。そして、太平洋戦争という破局に至った戦前とは異なり、日米両国は政治外交、経済分野の関係にとどまらない重層的な関係を構築している。本講義は、安全保障、政治外交、経済、文化、人的交流、思想、技術といった局面で日米がどのような関係を築いているのか、日米両国の文献や統計、映像などさまざまな資料を手がかりに、その具体像に迫ることを目的とする。	隔年開講
	アメリカ現代史	第二次世界大戦後のアメリカ政治・外交の歴史を講義する。第二次大戦後のアメリカは対外的には米ソ対立、朝鮮戦争、キューバ危機、ヴェトナム戦争、湾岸戦争そして同時多発テロを契機とするアフガニスタン・イラク戦争に関与してきた。他方、内政面ではニューディール連合と民主党優位によるリベラリズム時代を経て共和党の巻き返し、そして保守主義の時代を迎えている。講義では内政と外交を関連づけつつこれらの事件や戦争がどのように発生し、どのような結果をもたらし、そしてアメリカ社会や国民生活にどのような影響を与えてきたのかを検討する。	
	カナダ現代史	第二次世界大戦後のカナダとアメリカの関係を首脳関係を軸に講じたい。特にサンローラン首相とトルーマン大統領の関係(1948年)から現在に至るまでの主な二国間関係や争点を時系列に描写する。「非対称性」を特色とする関係であるが、とりわけカナダ側の立場から二国間関係の適切な管理がどのように成されてきたのかを、各政権ごとに評価していきたい。首脳関係の概略を理解することで、二国間の共通項や相違などについても、深い理解が期待できる。	隔年開講
	北米地域論	主として講義形式とする。そのなかでオーディオ・ビジュアルを幅広くとり入れる。目標として、北米大陸の89パーセントを占める米加両国の比較・関係を概観することによって北米地域の特徴を理解する。米加は多くの共通点と、きわだった相違点をもっている。メルティングポットとモザイク社会。WASP中心社会と多文化主義など。講義は両国の関係史からはじめ、経済、政治、文化など多面にわたる比較論を展開、最後にメキシコをふくめたNAFTAの分析、その展望を考える。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	American Society	かつてアメリカは世界のあこがれの国であったが、1960年代ころから「普通の国」どころか、むしろ忌み嫌われる国へと評判を落としていった。日本のアメリカ研究は長い間、「偉い」国に学ぶという姿勢が強かった。したがってまた、偉くなくなった国に対する研究の情熱も、近年急速に失われたように見える。しかしアメリカをよく知らないで日本が生き延びる道はない。この授業ではアメリカの何が変わり、何が変わらないのかを、象徴的な事件や日常のエピソードを切り口に考察する。	授業は英語で行う。
	US Foreign Policy	戦後日本に、政治、経済、文化などあらゆる面で大きな影響力を与えてきた国、アメリカ。この国の外交政策はどのように作られるのか。そもそも我々は、この国を正しく理解しているだろうか。本講義では、外交思想の歴史的源泉、ワシントンにおける連邦政治の仕組み、多様な民族や人種と政治的価値観からなる内政の事情などを、視覚教材も用いながら学び、伝統と変化に富む社会で展開されるアメリカ外交に対する理解を深めることを目的とする。課題を通し、受講生が特定の外交政策について分析と提言を行う能力の養成も目指す。	授業は英語で行う。
	US-Japan Relations	戦後日本の安全保障において、最も重要な国といえる米国。21世紀の日本外交像を描く上で、日米関係をどのようにとらえるかは中心的課題であろう。本講義では、日米関係の歴史を、特に終戦以降を中心に映像資料も活用しながら学び、冷戦後の国際環境において二国間関係が直面している問題点を検討する。日米関係史の知識をもとに、国際社会における日本の貢献や、日米同盟を含む日米関係観、日本国憲法のあり方など、今後の日本外交の方向性について、受講生が独自の考えを育成することを目標とする。	授業は英語で行う。
	Canadian Foreign Policy	カナダの歴史的・地理的・政治的背景がどのように外交政策に影響を及ぼしているか、また現在の外交政策がどのようなものなのか、具体例も取り上げながら理解することを目的とする。カナダの国としての成り立ちや多文化・多民族国家であることが国内外で及ぼす影響の他、安全保障政策(ミドルパワー、国連平和維持活動、対テロ戦争等)、加米関係、貿易関係、加日関係などを取り上げる予定である。また、講義のほか、英文資料をもとにしたプレゼンテーションやディスカッションを行い、積極的な授業参加を求める。	授業は英語で行う。
	北米経済論	本講義ではアメリカ経済について市場と政府との関わりという視点を軸に理解を深める。まず、産業構造の特徴を理解し、民主党と共和党の経済政策における考え方の違い、アメリカの政策立案制度を学んだあと、以下の各項目を制度・現状・政策についてそれぞれ3回程度の講義でカバーする。基本的な経済学の知識を必要とする。(1)経済・財政システム、(2)雇用・社会保障制度、(3)国際貿易・通商政策、(4)独占禁止政策・規制緩和。	
	北米企業経営	20世紀はアメリカの世紀であり、21世紀はアジアの世紀になるとよく言われているにも関わらず、アメリカの経済力と市場規模、そして「アメリカ型の経営方式」の影響と魅力は相変わらず強いものであるということは間違いない。特に中国、インドなどのアジア途上国の発展を分析すると、今こそ「アメリカ型の経営方式」の深い理解が必要不可欠であると思われる。本講義はテイラー主義とフォード主義の大量生産、大量消費体制の確立以降の「アメリカ型の経営方式」の歴史的な展開をベースとし、アメリカ型のマネジメント思想、会社法とコーポレート・ガバナンス、人事管理、労働組合と労使関係、合併買収、そして海外直接投資などのあらゆる視点から北米企業経営を分かり易く解説する。	
	北米企業分析	本講義では、北米企業の財務報告を用いて、外部利用者の立場から企業分析および評価を行う方法を学ぶ。具体的には、投資および企業評価方法のフレームワーク、企業を取り巻く環境に関する分析、企業評価モデル、財務諸表分析手法、将来性分析、企業の財務政策といったことに関する理解を深める。証券投資・企業買収など様々な目的のために分析が行われるため、投資におけるリスク・リターンに関しても学ぶ。授業形式は、ケーススタディを用いた討論を中心に行う。成績評価は、ケース発表、小テスト、レポートを基礎として行う。	
	アメリカ産業技術論	本講義では新しい製品・製法などが実用化され社会に貢献することをイノベーションと定義し、アメリカにおけるイノベーションの発生メカニズムを企業戦略、政府政策、社会制度という3つの面から理解する。以下の項目をそれぞれ2回程度の講義でカバーする。イノベーションの理論、イノベーションシステムの特徴、企業のイノベーション戦略、ハイテク産業育成政策、特許制度、大学の役割、地域産業クラスターの形成。経済学の応用であるので、理工系知識は必要としない。	
	アメリカ経済史	アメリカは現在、世界経済・文化の中心地であり、近現代史においては日本を含め世界に圧倒的に大きな影響を与えてきた国である。本講義は、アメリカの経済の歴史をデータの利用できる1789年から現代までを、(1) 頭頭期-パックス・ブリタニカの中のキックオフ、(2) 飛躍期-史上最強の農工業国へ、(3) 自由放任主義の危機-黄金の20年代から大恐慌期へ、(4) 成熟期-パックス・アメリカナの時代、(5) 相対的衰退期-財の生産優位大国の瓦解、の5段階に分けて具体的・実証的に明らかにする。	

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際 専門 科目	カナダ経済史	全体を3つの構成部分にわけ、第1に、国民経済の形成から第二次世界大戦までの時期を概観し、スーパーステール生産、本国への輸出、ナショナルポリシー、仏・英・米と大国支配の変遷などを講義する。第2に戦後メガプロジェクトの時期からトルドーの「第三の選択」まで、対米従属からの脱却をふくむカナダ経済構造の変化をみる。第3に、マルルーニー時代の米加自由貿易体制、その発展としてのNAFTA、そしてグローバル化したカナダ経済の到達点までを講義する。	
	US Economy	アメリカの大学でのマイクロ経済学・産業組織論の代表的なテキストの一部、最新の雑誌・新聞記事を用いてアメリカ産業の現状、企業の行動、政策について英語で講義を行う。受講生は予習が不可欠であり、授業中にReading Assignmentの内容を解説してもらうこともある。さらに、最後の数週では、グループごとに分かれて、自分たちでテーマを絞って調査を行い、英語でのプレゼンテーションを行ってもらう。	授業は英語で行う。
	Management in North America	「Management in North America」は北米地域で概念化され実行されている経営についての基本的要素を検証する入門講座である。この授業では、経営者の職務である企画、組織化、指揮、統括の業務に関連した題目を取り扱う。さらに、これらの経営者業務がどのように組織戦略、組織設計、組織行動に関連するかということに焦点を当てる。受講者は教科書、読解、ケーススタディ、教室内シミュレーションを通して、経営の概念的・実際の課題を検証する。	授業は英語で行う。
	Human Resource Management in the USA	現在の競争的な市場において、企業が成功するためには、人材を最大限に活用しなくてはならない。この授業の目的は、アメリカの企業において、企業の利益を最大化するために行われている人材管理の諸相について、詳細かつ批判的に分析することである。人材管理の様々な側面として、雇用計画、採用活動、選抜、オリエンテーションとトレーニング、補償や保険制度、労働意欲、労使関係、評価、法制度などを扱う。法制度については、雇用と昇進における機会の平等といった問題も扱う。授業では、テキスト、テキストの内容を補充するビデオ教材、プリント教材を使用し、事例研究も行う。成績評価は、論述形式のテストとレポートによって行う。参加する学生には、授業への参加と積極的に討論を行う姿勢が求められる。	授業は英語で行う。
	Marketing in the USA	世界最大の経済大国であるアメリカは、企業にとって商品やサービスの販売先として望ましい市場である。この巨大で多様な市場に内在する富を獲得したい企業にとって、アメリカ市場は挑戦の場である。この授業は、アメリカ市場の分析を行う授業である。はじめにマーケティングの基礎について説明し、アメリカ独特の諸相について重点的に説明する。アメリカ市場独特の特徴として、多文化主義的なマーケティング、社会的影響、パーセプション(perception)、セグメンテーション(segmentation)、企業の姿勢、ブランド化、文化や道徳への配慮などについて、説明する。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	中国思想文化論	本講義では、現代中国に見られる様々な文化現象を取り上げ、それを各現象の基層に存在する中国の伝統思想や近現代思想との関連から分析することにより、思想領域から見た現代中国文化の特質を考察していく。考察に際しては、古来、中国思想・中国文化と密接な関わりを持ってきた日本文化やその他のアジア地域文化についても触れ、また急速にグローバル化しつつある今日の世界と中国思想文化との交渉についても注目していく。	
	アジアメディア文化論	日中の歴史認識の溝が深刻だった10年ほど前の中国での取材経験やその取材がきっかけで関わるようになったNPO活動で知った中国の若者の姿から、中国が世界国家としての自信をつけつつあることが感じられる。この中国の変化を認めるときメディアの関わりを見逃すことはできない。ここではアジアで大きな存在となってきた中国メディアを取り上げる。受講生はこの授業を通して、「メディアは民主国家の象徴である」ことを再認識する。	
	アジア言語文化論A	異なる文化を背景とする人と人の中にはカルチャーショックが起こりやすい。特にある文化を背景とする人々の間に使われる極めて普通の言語表現は、他の文化を背景とする人に対して発話すると、発話の意図と異なる意味になる場合がある。この授業は、中国語と日本語を対象として、特に中国語と日本語における言語と文化の相違に目を向けつつ、文化が如何に言語表現の形成や選択に影響を与えているか、また、言語が如何に文化を投射しているかを中心に授業を進めていく。	
	アジア言語文化論B	韓国は、1945年の「解放(第2次大戦の終結)」以来、奇跡といわれるほどの目覚ましい経済発展を遂げ、いまやアジアの主要国に成長している。しかし、その過程で韓国が経験してきた数々の急激な社会変化は、言葉や文化などにも多くの影響を与えている。この授業では、近年の韓国の主な社会現象とその影響などを、言葉を中心に、日本の場合との比較を通して観察していく。併せて、ある社会で使われる言葉に、その使い手たる社会の構成員の考え方や物の見方はどのように反映されるのか、という問題についても考えてみたい。	
	日韓言語文化比較論	「世界で最も似ている」といわれるほど、共通点の多い日本語と朝鮮語であるが、この授業では、その両言語を言語学的な観点から対照・比較していく。一般言語学の基礎知識にも触れつつ、具体的なデータを通して、個別の言語現象から大枠までを広くカバーし、相違点及び共通点を観察する。さらに、それらを生み出した文化的・社会的背景などについても説明する予定である。授業は、初級程度の朝鮮語の知識があった方が望ましいが、朝鮮語力のレベルに関係なく理解できるような形で進める。	
	対人関係とアジア言語表現比較論	日本とアジア諸国との関係はますます緊密になっており、これまで以上の相互理解が必要となってきている。本講義では、このことを念頭に置き、対人関係の把握の仕方やコミュニケーション行動において、日本人は、中国人、韓国人などのアジアの人間とどのような点で共通し、また相違しているのか、そしてそれらが、言語表現としてどのように表れているのかを考察する。敬語やポライトネス、また謝罪や感謝などの言語行動を一つひとつ比較しながら、より深い相互理解を目指す。	
	アジアの女性とジェンダー	アジアの各地域における女性の歴史に目を向け、過去と現在を対比し、それぞれの社会が抱えている問題を明らかにする。新興国として注目される中国、その周縁に置かれている台湾、そして西アジアなど、それぞれの地域における、女子教育、女性の身体、女性解放、女性の労働、文学・芸術、女性の政治参加、女性の信仰、女性にとっての婚姻・家庭等について、その変遷と現状をとらえる。同時にアジアの諸地域相互の関係にも触れる。	
	言語習得と日本語教育	本講義では、近年、急速に多文化化の進む日本社会において、外国人が日本語を学ぶ際に直面する問題と、彼らに対する日本語教育の方法論について、具体的な事例を通して学ぶことを目的とし、以下の3点を柱に進める。(1)言語としての日本語の特徴を学び、母語を相対化して見る視点の必要性を知る。(2)日本語を外国語として学習者が習得する際にどのような問題があるのかについて、具体的な例を通して学ぶ。(3)現在日本語教育の現場で広く行われている日本語教育の方法論の目的と有効性を学ぶ。	
日本語学と日本語教育	言語表現の形式と意味を形成する規則やその規則を成り立たせるメカニズムの究明が日本語学の分野の仕事だとすれば、日本語のなにを、どのように教え、習得させるかは日本語教育の分野の仕事になる。日本語教育を円滑に行うために日本語学のサポートが必要であるのに対し、日本語学のスタディーを掘り下げるためには、日本語教育のフィードバックが必要である。この授業は、日本語学と日本語教育の役割関係を中心に、日本語非母語話者を対象とする日本語の教育を行うために、最も必要とされる基礎の構築を目標とする。		

授 業 科 目 の 概 要

(国際学部国際学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	東アジアの宗教と国家	本講義では東アジアにおける宗教と国家間の、複雑でダイナミックな、時に相反する関係を歴史、社会および政治的観点から考える。講義の構成としては前半と後半の二部から成る。前半では前近代東アジア諸国での宗教集団と国家権力との依存関係と軋轢を概観する。後半では19世紀以降この地域において、宗教と政治権力との関係が、民族主義、帝国主義、布教活動、民主主義、そして政教分離主義からの衝撃を受けてどのように変化してきたかを分析する。	
	Religion and State in East Asia	本講義では東アジアにおける宗教と国家間の、複雑でダイナミックな、時に相反する関係を歴史、社会および政治的観点から考える。講義の構成としては前半と後半の二部から成る。前半では前近代東アジア諸国での宗教集団と国家権力との依存関係と軋轢を概観する。後半では19世紀以降この地域において、宗教と政治権力との関係が、民族主義、帝国主義、布教活動、民主主義、そして政教分離主義からの衝撃を受けてどのように変化してきたかを分析する。	授業は英語で行う。
	Cultures in Australia	1970年代以降、オーストラリアは白豪主義から多文化主義への劇的な転換を遂げた。オーストラリアは、現在、人口の2割以上を海外出身者が占める、世界でも有数の移民国家であり、その多文化的状況は現在進行形で進展している。本講義は、オーストラリアや多文化主義研究の入門編として、オーストラリア社会における急激な社会変化と文化の関係に注目しながら、移民コミュニティ・観光・メディア・政策・先住民など様々な局面におけるオーストラリアの多面的な文化を考察する。	授業は英語で行う。
	Religions in China	このコースでは中国に見られる複数の宗教伝統の歴史と現状を概説するのが目的である。コースは時代別とテーマ別の二部構成となっており、歴史資料と社会・人類学的文献を用い中国の主たる宗教伝統について学ぶ。学際的なアプローチを取り入れ、ジェンダー、階級、政治、文芸などの視座から教義、教派、儀礼、宇宙観、世俗化、原理化、リバイバル運動について考察する。なかでも、19世紀以来近代化の衝撃の中で中国の宗教はどのように変化したかという問題に焦点を当てる。教材は主に英文で、必要に応じて日本語の補助教材を用いる。	授業は英語で行う。
	Traditional Japanese Arts	日本古来の芸術すべてに共通する特徴はあるのか。歴史の中で芸術が果たしてきた社会的、政治的機能とは何なのか。一つの芸術はその他の芸術にどのように影響を及ぼしてきたのか。日本の芸術の本質は、その他の文化における芸術とどのように比較・対照されるのか。これらの問題を踏まえ、この授業では、文学以外の様々な芸術について、講義と討議による従来の授業形式に加えて、視覚的教材も取り入れながら検証する。日本の芸術と美学、伝統建築、日本庭園、茶道、陶芸、華道、木版画、舞台装置や舞台衣装のデザイン、歌舞伎、文楽、日本映画などのテーマを取り扱う。	授業は英語で行う。
	Japanese Outlaws	この授業では、過去から現在に至る日本の価値システムの中核の変化について知るために、社会的な境遇に反抗する役を演じる大衆演劇や映画、文学に登場する多くの歴史上、虚構上の無法者(Outlaws)について検討する。従来の講義とディスカッションによる授業スタイルに加えて、映画フィルムや講義資料も使用する。授業では、古典的な民間伝承における無法者、サムライの復讐、不倫や心中、女たらし、盗賊、ごろつき、大衆文化における暴力団、無法者物語の隆盛、19世紀のギャンブル社会、股旅者の英雄的行為、ニヒリズム、ヤクザ映画などをテーマとして扱う。	授業は英語で行う。
	Introduction to Japanese Literature	日本文学にはその他の世界の文学と区別される顕著な特徴があるのだろうか。日本文学の主要なジャンル、テーマ、形式とは何か、そして、それらはどのように発展してきたのか。授業では、これらの問題を、集中的な講義、講義、討論を行い検証する。授業では、万葉集や古典的な宮廷文学、日記、源氏物語、能楽、平家物語やその関連文学、近松の悲劇、芭蕉の俳句、西鶴の浮世、伝統的なユーモアやファンタジー、そして、最近の現代フィクションなどを含む、広範囲にわたる日本文学の翻訳版を取り扱う。	授業は英語で行う。
	Introduction to Japanese Culture	古典建築、庭園、美術と伝統は、京都を独特で日本的なもの全てを扱う生きた博物館にしている。この授業では、日本文化について初めて学習する学生に対して、京都の名所・旧跡や京都を舞台にした物語について、社会学的見地から検討し、紹介する。文献講読と講義に加えて、京都の歴史を扱った舞台演劇や映画、文学などを扱った視覚教材を使用し、また学生のフィールドワークも行う。扱うテーマは、平安時代の都における生活と習慣、寺院の文化、芸者の世界、伝統的な手工芸や職人、祭りと四季、上方文化などである。	授業は英語で行う。
	Contemporary Korean Studies B	この授業では、書籍、映画、雑誌、その他の視聴覚資料から、ポップカルチャーを含む現代の韓国社会の側面を紹介する。また、伝統的社会、現代社会の両面におけるジェンダーの視点から、文化が政治的イデオロギーに及ぼす影響について批判的に検討する。授業内容は、①講義(「文化の位置」、「韓国伝統の文化と現代大衆文化」、「社会の中での映画、テレビ、演劇、文化の役割」、「経済発展との関連におけるKorean Wave」、「支配的な文化的規範」、「文化に関連した描写とイメージの構築」)、②プレゼンテーション(「アジアにおけるKorean Wave現象についてのケーススタディ」)、③プレゼンテーションと討議(「教育やマスメディアにおける女性と家族」)など。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	アジア社会論	グローバリゼーション下でアジア社会は大きな変動を体験しつつある。社会を権力・指令関係からなる「政治」、契約・市場関係により形成される「経済」および一体化ないし連帯関係を軸とする「共同」の3つの社会相からなるものと考え、この変貌しつつあるアジア社会の全体像の理解をめざす。西欧近代社会を基準とすれば「前近代」的特質を抱えながら、植民地下とそれに続く「開発」過程で「近代」を経験したこの地域が、グローバリゼーションという「後近代」の世界のなかでどのような役割を果たしうるのか?について少しでも明らかにできればと考える。	
	韓国の政治と外交	本講義では、韓国の政治および外交を、米軍政期から現在にいたる時期に焦点を当てて検討する。いまや韓国が東アジアのみならず国際社会にあってきわめて大きな存在であることは言うまでもない。しかし、そこに至る道は朝鮮戦争、軍事クーデター、民主化闘争など多くの困難の連続であったと言って良い。また、この過程では、朝鮮半島におけるもう一つの政権である北朝鮮との関係が少なからず影響を及ぼしてきた。本講義では、そうした国際関係的視点、南北関係の視点を常に念頭に置きつつ韓国の歩んできた道を歴史的に跡づけるとともに、それを通じて韓国政治の特質に関する理解を深める。	隔年開講
	朝鮮半島論	本講義では、第二次世界大戦以降の朝鮮半島を巡る国際関係の展開を検討する。第二次世界大戦後、朝鮮半島には韓国と北朝鮮の二つの政権が誕生し、対立、紛争、競争を繰り返してきた。また、米中露などの大国は朝鮮半島を舞台として相互応酬を繰り返してきた。さらに隣接地域としての日本にとって朝鮮半島情勢が大きな意味を持つことはあらためて指摘するまでもない。朝鮮半島情勢が複雑で理解が難しいのはこのためである。こうした観点から、本講義では、朝鮮半島情勢を、南北関係、国際関係の二つの視点から考察し、日本にとっての意味を検討する。	
	中国の政治と外交	あれだけ巨大な国家が、どうやって分裂もせず、一つにまとまっているのか、それどころか、どうやって30年前の改革開放路線への転換以来、高度成長を続けてこられたのか。この素朴な疑問を手がかりに、本講義では中華人民共和国の政治と外交について、主に以下の内容について、講義形式で行う。「中国の政治体制・政治制度」、「中央と地方の関係」、「『二つの中国』—都市部と農村部」、「人民解放軍とその政治的役割」、「台湾問題、少数民族問題」、「中国外交—原則と実践」、「中国の対外政策決定システム」、「対外経済関係」。	
	アジアの国際関係	本講義では、第二次世界大戦以後のアジアの国際関係について、その歴史的展開を整理し、構造的に検討する。アジアで発生する事象は、アジア地域内の相互応酬のみではなく、よりグローバルな国際関係と相互に密接不可分な関係にある。それゆえ、本講義では、アジア諸国間の相互応酬のみならず、米国、ロシアなど域外諸国のアジア政策を含めてより広範な枠組みの中でアジアの国際関係についても検討する。とりわけ、アジア諸国は経済的格差もあり価値観も異なるため多様性をその特徴とするが、本講義ではそうした多様性のみならず、総体としてのアジアの可能性についても考える。	隔年開講
	アジアの法	アジア地域の法を、①原国家法体制、②植民地国家法体制、③開発国家法体制という区分にしたがって歴史的に概観する。続いて、現段階をグローバリゼーション下の「ポスト開発国家」として位置づけ、現在これらの地域で生じつつある法と社会の変動の問題を、政治社会(ガバナンスと人権)、経済社会(市場と企業組織)及び共同社会(コミュニティと正義)に分けて、概括的に検討する。対象地域は、日中韓を中心とする東アジア、ASEAN諸国よりなる東南アジア、インド亜大陸よりなる南アジアを中心とするが、必要に応じた他の地域にも言及する。	
	現代中国史	現代中国を理解するために必要な第一歩は、政治史を頭に入れることである。1949年の中華人民共和国建国後を中心に20世紀中国の政治史を通観し、今後の学習に不可欠な知識を確認するため、以下の内容について、講義形式で行う。(1)20世紀前半の中国近代史: 清朝崩壊から中華人民共和国成立までの概観。(2)20世紀後半の中国現代史: 毛沢東時代1(1949～1964)、毛沢東時代2(1964～1978)、鄧小平時代(1978～1992)、江沢民時代以降(1992～)。以上に加え、中華世界の多様性を知るため、台湾、香港の政治史についても言及する。	
	ASEAN現代史	本講義では、東南アジアの地域的国際機構であるASEAN(東南アジア諸国連合)の生成、発展、変容、今後の展開について時代を追いながら講義を行う。ASEANが誕生したのは1967年のことであるが、東南アジアに地域機構を設置しようという構想は1960年代初頭から存在した。そこで、本講義では第二次世界大戦後のASEAN成立前史から遡り、その時代の重要トピック(たとえば、ベトナム戦争終結、カンボジア紛争、APEC設置、アジア通貨・経済危機、中国の影響力増大)を詳しく取り上げながら講義を進める。	

授 業 科 目 の 概 要

(国際学部国際学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	アジア研究コース科目 オセアニアの政治と外交	移民国家オーストラリアの成り立ちとイギリス連邦の一員としての外交からアジア太平洋国家へと変貌を遂げてきたオーストラリアを中心に、大国との外交、近隣諸国との外交を政治経済、安全保障の分野から考察する。対イギリス、対アメリカ、対日本、対アセアンとの4つの軸からアジア太平洋国家として存在感を増しているオーストラリアの姿を理解する。全15回のうち、大半は講義形式で構成し、クイズを2回程度、定期試験を加えた総合評価で成績を決める。講義のなかでビデオ、新聞など講義内容を深める題材も適宜活用すると同時に、履修学生にも一度はオーストラリアとアジア太平洋という授業に関係したテーマでの発表を求める。講義で扱うテーマは多民族国家オーストラリアの成立、白豪主義とイギリス連邦、ANZUS、オーストラリアと日本、オーストラリアとアセアン、オーストラリアと南太平洋関係、オーストラリアとAPEC、オーストラリアと重縮外交など。	隔年開講
	International Relations in ASEAN	アセアンが成立する過程と成立後の紛争を内に抱えつつも、地域的強靱性を増してきたアセアンの姿をアセアン5からアセアン10の拡大に至る政治経済、安全保障の諸問題を理解する。アセアンの外交(アセアンウェイ)と多国間主義をキーワードにアセアンがなぜ今日、中小国の集まりであるにもかかわらず、アジア太平洋の多国間、多角的な取り決めに構築できるのか、アセアンの抱える問題点は何なのかを取り上げる。最初の3回程度は担当者によるアセアンウェイとアセアンの発展についての講義を行う。残りはアセアン関連の英語文献、英字新聞のなかに見られるアセアンの会議外交を適宜活用し、履修学生のハンドアウトによる毎回のテーマの報告と討論を中心に構成する。取り扱うテーマは、アセアンの重要な外交テーマ、アセアンとアメリカとソ連、アセアンと冷戦、アセアンとベトナム、アセアンと日本、アセアンとオーストラリア、アセアンと中国、アセアンとミャンマー問題、アセアンビジョンと共同体形成についてなど。	隔年開講 授業は英語で行う。
	Asia-Pacific Relations	アジア・太平洋地域における国際関係(19世紀半ばから現在まで)に関する基本的知識を体系的に提供することが本講義の目的である。北米の大学で提供されている同じ程度の知識量を扱う。よって教科書は北米で使用されているものを採用する。本講義は学際的アプローチを採用するものの、国際政治学ならびに国際史がその中心をなす。歴史事件に関するビデオなどの副教材も積極的に使用する他、小グループ討論といった教育手法も採用する。	授業は英語で行う。
	Prewar US-Japan Relations	本講義では、ペリー来航の幕末期から太平洋戦争の勃発まで、およそ100年の日米関係を政治外交史の観点から論じる。現在の日米同盟を理解するために、両国の関係を子細に検討する作業は必要となるが、その歴史を単に通史として扱うのではなく、重要な歴史的イベントや政策決定者の人物像に迫りながらより多面的・重層的な日米関係の姿を映し出すのが主な狙いである。なお、テキストとしては、2008年に刊行された五百旗頭真編『日米関係史』(有斐閣)と共に、英字教材を用いる。	授業は英語で行う。
	Prewar Japanese Political History	この講義は、江戸後期から太平洋戦争開始までの時期における、日本政治史の主要なトピックを紹介・分析することを目的とする。具体的には、江戸後期の社会における近代化への準備、明治維新の性格、西南戦争と自由民権運動、大日本帝国憲法と議会政治の開始、日清戦争と日露戦争、伊藤博文と山縣有朋、大正デモクラシーとウィルソン主義の影響、ワシントン条約体制、日本の軍国主義、満州事変、日中戦争、太平洋戦争への道等を取り上げる。なお、本講義は英語で行い、最終試験も英文の論述形式で行う。	隔年開講 授業は英語で行う。
	Postwar Japanese Political History	第二次世界大戦後の日本政治について、占領期から最近までの国内政治の展開を歴史的に講義する。特に、自由民主党を中心とした政党政治の枠組、吉田茂を始めとする主要な政治家の政治指導、経済政策や社会保障政策など重要政策の個別的展開、政治と経済情勢や社会状況との相互連関などが主なポイントになる。受講後には、当該内容に関する基礎的な知識を習得するとともに、基本的なテーマについて文章化する力を身につける。その達成度は、学期末試験もしくはレポートによって測る。	授業は英語で行う。
	Postwar Japanese Diplomatic History	第二次世界大戦後の日本外交について、占領期から最近までの展開を歴史的に講義する。特に、戦後日本にとって重要な同盟国であるアメリカとの同盟関係の変遷、日本外交における国連等国際組織の意義の変化、中国・韓国・東南アジアなどアジア太平洋諸国との関わり、安全保障や国際通商・金融など主な外交政策領域の個別的展開、日本国内での外交政策決定過程などが主なポイントになる。受講後には、当該内容に関する基礎的な知識を習得するとともに、基本的なテーマについて文章化する力を身につけてほしい。その達成度は、学期末試験もしくはレポートによって測られる。	授業は英語で行う。
	Contemporary Korean Studies A	この授業は、現代韓国社会の歴史背景についての初歩的な知識を必要とする学生を対象とする。授業では、韓国の歴史の変化を時系列的に辿るといよりも、むしろ変動の激しい現代韓国社会の地政学的な状況について検討し、そして現在の状況を巻き起こした過去の出来事について振り返る。また、日本による占領統治時代の遺物や、アメリカの歴史的な影響、軍事主義、ジェンダー、社会運動や教育のような現代の問題についても検証する。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要

(国際学部国際学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	アジア経済論A	標準的な開発経済学をベースに、アジア経済の発展メカニズムを学ぶ。アジア経済は発展途上地域の中で唯一、先進国経済との所得格差縮小に成功している例外的な地域である。その秘訣の一端は「アジア経済の奇跡」として明らかにされているが、他方で、「アジア経済危機」は同地域の脆弱性による議論も多い。この科目では、開発経済学の基礎を学びつつ、アジア地域の強さと弱さを含む発展メカニズムの特徴を明らかにし、そこから得られる一般的含意を探る。	
	アジア経済論B	標準的な国際経済学をベースに、国際経済の統合化に直面するアジア経済の課題を検討する。国際経済はモノ・ヒト・カネ・チェ・ワザの国際移動性の高まりによってグローバル化している。アジア経済は、まさにその中にあってグローバル化の便益を巧みに享受している地域である。貿易や直接投資、金融資本フロー、知識・技術フロー、また労働移動の活発化はアジアの内外経済にどのような課題を突きつけているのだろうか。この科目では、国際経済学の基礎の上に立って、これらの課題への取組を検討する。	
	中国経済論	1949年の中華人民共和国成立以来、中国経済は大きく変動してきた。特に、1978年末以来、中国経済は経済改革・開放政策によって大きく変化してきた。現在、これまで高い経済成長率を達成してきた中国経済は様々な課題に直面している。本講義の目的は、中国経済全体がどのように発展してきたのか、中国経済の各産業部門はどのように発展してきたのか、直面している様々な課題について解説し、今後の中国経済の展望についても講義する。	
	韓国経済論	「漢江の奇跡」と称賛された韓国経済の発展プロセスを実証的に論ずる。また、将来の東北アジア経済の展望にも言及する予定である。授業は主に講義形式で行い、必要に応じて資料等を配布する。韓国経済の実態をより明確に認識させるとともに日本との経済関係を理解させることを目標とする。評価は期末テストと平常評価を考慮して最終評価を行う。授業計画として、韓国経済の歴史的背景、経済開発計画、産業構造、外資導入、国際収支、韓国企業、日本との経済関係、南北経済関係、最近の韓国経済及び課題、などを取り上げる。	
	中国企業経営	中国は、90年代から急速な経済成長を遂げ、近年、経済新興国の一員として脚光を浴びている。グローバル経済の拡大を背景に、中国企業の経営活動は他国企業との接点が増えることで変貌しつつある。この講義の目的は、①中国企業を取り巻く法的規制と、②中国企業の経営管理という2つの側面を通じて中国の企業経営活動への理解を深めることにある。本講義では、まず、会社法・証券法・税法の視点から企業に対する各種規制を概説する。次に、企業の資金調達、コーポレートガバナンスなどについて紹介する。最後に、ケース・スタディーを通じて、中国企業の経営実態を学ぶ。	
	アジア会計論	国際会計基準審議会(IASB)による国際会計基準(IFRS)の開発が着実に進んでいる中、各国の会計基準の管轄当局はIFRSへの対応に迫られている。特に東アジアおよび東南アジアでは、近年の急速な経済成長によって資本市場の整備も進み、資本市場のインフラでもある会計基準の開発が重要な課題となっている。このような経済環境を背景に、多くのアジア諸国がIFRSを採用している。本講義では、IASBの最新動向、IFRSの現状を踏まえながら、IFRSへのコンバージェンス(統合・収斂)あるいはIFRSの採用が、アジア主要国の会計制度にどのような影響を与えるかについて分析し、特に中国、韓国、シンガポール、インドなど各国の会計制度のあり方について概観する。	
	East Asian Economies	標準的な国際経済学・開発経済学をベースに、グローバル化に直面するアジア経済の課題を英語で講義する。グローバル化はモノ・ヒト・カネ・チェ・ワザの国際移動性の高まりによって起こり、アジア経済は、まさにその中にあってグローバル化の便益を巧みに享受している地域である。先進国が自らの発展プロセスで経験したことのないような、かつてなかった相互依存環境と、かつてなかった急速な経済発展プロセスのなかでアジア経済はどのような舵取りを迫られているのだろうか。この科目では、これらの課題へのアプローチを探る。	授業は英語で行う。
	Chinese Economy	本講義の目的は、1978年末以来の経済改革・開放政策下で高い成長率を達成してきた中国経済を解説し、受講生が中国経済の理解を深めることである。具体的には、中国経済の発展過程、特に、経済改革・開放政策下の発展過程を1978年末から1991年まで、1992年から2001年まで、2002年から現在までの3期間に分けて解説し、人口、労働、貿易、外国直接投資、環境問題、エネルギー問題、所得地域格差問題などのテーマについて講義する。	授業は英語で行う。
	Management in Japan	「Management in Japan」は日本で概念化され実行されている経営についての基本的要素を検証する入門講座である。この授業では、組織戦略、組織設計、組織行動に関連した題目を取り扱う。また、経営者の職務である企画、組織化、指揮、統括業務に影響を及ぼす制度的・文化的背景に焦点を当てる。受講者は教科書、読解、ケーススタディ、教室内シミュレーションを通して、経営の概念的・実際の課題を検証する。	授業は英語で行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際専門科目	Japanese Financial Practices	本講義では日本企業の資金調達、資本政策、投資意思決定そして資金提供者への資金還元政策など財務の戦略的実践が、どのような経済的背景で、世界的にユニークといえる今日の姿に進化していったかを、世界との比較見地で学習していく。また、日本の代表的企業の事例を使用しながら、世界市場で競争する日本企業の財務行動が、欧米企業と比べ、どのような相対的メリットや課題をもたらし、そしてそれらがどのように企業の競争力に影響を及ぼしたのかを検証していく。	授業は英語で行う。
	Japanese Corporate Governance	日本的経営の根幹は、そのユニークなコーポレート・ガバナンスにあるといわれている。本講義では、系列、株式持合い、メインバンク制度などに代表される企業保有形態、そして従業員・経営者一体となった経営・意思決定システムなどのユニークな日本型企業統治をもたらす企業業績、市場パフォーマンス、成長機会創出などへの影響を議論する。そのなかで、欧米企業の市場型コーポレート・ガバナンスとの違いを浮き彫りにしていく。	授業は英語で行う。
	East Asian Finance	この授業の目的は、アジア太平洋地域の金融市場のアイデンティティ分析に関心を持つ学生に、金融の基本的な概念を説明することである。授業では、GDP、対外取引、日本、中国、韓国、台湾、香港、シンガポール、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、太平洋地域の金融システムの説明に重点を置く。これらの国の金融機関や金融市場が関与する分野の問題についても取り上げる。世界規模の金融市場のグローバル化は、これらの地域において資金調達を必要とする法人や企業が、国内の金融市場に限定せずに他国の市場でも資金調達を行うことを意味している。また、国際金融市場の統合を導く要因として、1)市場の自由化、2)世界の市場をチェックするための技術の進歩、3)金融市場の制度化の進化についても説明する。	授業は英語で行う。
研究演習科目	研究演習 I	本授業の目的は、受講生が関心をもつ北米地域(アメリカ、カナダ)、東アジア地域(中国、アジアNIEs、ASEAN、そしてオセアニアを含む)を中心に、受講生が関心をもつ学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に関する課題について学習し、まとめ、理解することである。それを目的に北米や東アジアを中心に様々な地域の課題を様々な角度から考察する。ゼミの受講生による報告・質疑応答を通じてプレゼンテーションの方法についても学習する。	
	研究演習 II	本授業の目的は、受講生が関心をもつ北米地域(アメリカ、カナダ)、東アジア地域(中国、アジアNIEs、ASEAN、そしてオセアニアを含む)を中心に、受講生が関心をもつ学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に関する課題を理解、分析することである。さらに、各自が選んだ地域(北米や東アジア)を中心に、そこで見出される様々なテーマを様々な角度から考察し、卒業論文を作成する。ゼミでは、各々の受講生に、卒業論文作成のための指導と助言を行う。	
	Research Seminar I	本授業の目的は、英語のみを用いて受講生が関心をもつ北米地域(アメリカ、カナダ)、東アジア地域(中国、アジアNIEs、ASEAN、そしてオセアニアを含む)を中心に、受講生が関心をもつ学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に関する課題について学習し、まとめ、理解することである。それを目的に北米や東アジアを中心に様々な地域の課題を様々な角度から考察する。ゼミの受講生による英語のみによる報告・質疑応答を通じてプレゼンテーションの方法についても学習する。	授業は英語で行う。
	Research Seminar II	本授業の目的は、英語のみを用いて受講生が関心をもつ北米地域(アメリカ、カナダ)、東アジア地域(中国、アジアNIEs、ASEAN、そしてオセアニアを含む)を中心に、受講生が関心をもつ学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に関する課題を理解、分析することである。さらに、各自が選んだ地域(北米や東アジア)を中心に、そこで見出される様々なテーマを様々な角度から考察し、英語によるGraduation Thesisを作成する。ゼミでは、各々の受講生に、英語のみを用いてGraduation Thesis作成のための指導と助言を行う。	授業は英語で行う。
	卒業論文	「研究演習 II」における学習と連携しながら、卒業論文執筆のための具体的指導を行う。受講生は各自の設定した研究テーマに関する資料収集・整理の手法を修得したうえで、自ら構想を練り、研究発表・討論を通じて内容の充実をはかり、論文として完成させる。	
	Graduation Thesis	「Research Seminar II」における学習と連携しながら、Graduation Thesis執筆のための具体的指導を行う。受講生は各自の設定した研究テーマに関する資料収集・整理の手法を修得したうえで、自ら構想を練り、研究発表・討論を通じて内容の充実をはかり、論文として完成させる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
領域 関連 連 科 目	英語学概論	科学的な英語学がこれまでの英語とどのように違うのかを理解することを目的とする。英語学(English linguistics)は、「英語の言語学」である。英語言語学とはどういう学問なのか、どのような世界がひらけるのかを、文法の仕組み、文の構造、単語の作り方、意味の理解、そしてコミュニケーションの仕組みの理解に重点を置いて講義する。 (浦 啓之 兼任教授) 英語言語学としての導入と、文構造、副詞句の挿入位置と規則性、文要素の移動と省略の解明を中心とした統語論について講義する。 (楠本 紀代美 兼任准教授) 英語言語学における形態論、意味論、語用論の概論について講義する。形態論では単語の構造、意味論では単語や文の意味、語用論では言外の意味について講義する。	共同担当
	英語音声学	英語の音声の仕組みを発声器官の機能の点から、また各母音と子音の特徴をIPA(国際音声記号)により解説し、音声学の基礎概念を講義する。また、個々の音韻に加え、派生語や複合語における強勢、句や文における強勢とイントネーション、語連鎖における連結発音、文のリズムの基礎を教示し、自然な英語の発音を身につけさせる。	
	統語論	人間言語の特性を科学的に解明する理論言語学の中心に位置する統語論の基本的考え方を、抽象的な概念にとどまらず、英語と日本語、さらにはその他の言語と比較するなかで、具体的な言語構造の分析手段を修得させる。講義の流れは以下のとおりである。 I. 句構造を成り立たせる規則(X-bar Theory) II. 名詞句の内部構造(DPとNP) III. 文の内部構造(IPとCP) IV. 代名詞・再帰代名詞の用法(Binding Theory) V. 要素の移動と移動の制約(Movement Theory)	
	意味論・語用論	言語学で扱う「意味」の種類、認知意味論と形式意味論によるアプローチの違い、語彙レベルと文レベルの意味の違い、類義語・反対語などに見られる意味ネットワーク、文における語順と伝達機能の関係、対人関係における丁寧さ(ポライトネス)、会話における協調原理、会話の含意と論理的な含意などについて、英語と日本語を例に示しながら、意味論と語用論の基礎概念を教示する。	
	英語史	最初期から現代までの英語の変化について、イギリスおよびアメリカの政治的、文化的な歴史や外国からの影響などに由来する外的要因にも留意しながら、英語がたどってきた言語変化の内的要因を、古英語(450～1100年)、中英語(1100～1500年)、および初期近代英語(1500～1700年)の書き物を取りあげて講義する。	
	音韻論・形態論	音声の集まりである形態素、その集まりである単語に関する語形成(形態論)にともなう生じる音声の変化やアクセントの変化を考察する音韻論について、英語と日本語を中心に講義するとともに、単語より大きな単位である句や文におけるアクセント、イントネーション、リズムの現象にも着目し、音声に関する言語間の類似と相違を指摘する。	
	英米文学研究法	英米文学作品を考察、分析するなかで、文学研究の方法を教示するとともに、歴史的、社会的、文化的な視点からの解釈、文学作品を考察する方法、あるいは文学批評の理論を講義する。「読み解く」ことを小説、詩、演劇、映画を題材にして試みる。これらを通して「アメリカ文学」「批評理論」「アメリカ文化」「イギリス文学」「イギリス文化」の研究法の確立をめざす。	
	イギリス文学史A	イギリス文学の特質を中世、ルネサンス、17世紀、オーガスタン、19世紀ロマン派、ヴィクトリア朝、現代といった時代に分けて俯瞰し、その全体像を通史的なパースペクティブの中で理解する。授業は講義形式で進め、中心となるトピックを設定し、これに関連した文学と周辺領域の資料を読み解きつつ具体的な作品論を提示し、イギリス文学の流れを通史的に概観する。	
	イギリス文学史B	ルネサンスの終焉から、古典主義を経て、ロマン派へ至るイギリス文学の推移と文学現象を辿る。それぞれの時代の文学現象がイギリス社会、或いは西欧社会の変革を反映し、変化していった過程を理解し、知識を身につける。講義形式で展開し、先に記した時代を代表する作家の作品の中から、最も特徴的な作品を取り上げ、単なる解説ではなく、作品の中に掘り下げ、考察する。	
	アメリカ文学史A	17世紀から19世紀半ば過ぎまでのアメリカ文学の歴史における変化と発展、ネイティブ・アメリカンの歌から、植民地時代の宗教文書、初期アメリカ小説および詩、アメリカン・ルネサンス期の小説および詩に至るまでを対象に、現代の多文化主義の視点から民族や性差に配慮しながら考察を加える。	
アメリカ文学史B	19世紀後半から20世紀後半までのアメリカ文学の歴史における変化と発展、リアリズム、自然主義、モダニズム、ポストモダニズム、エスニック、マイノリティ文学などの小説、詩、演劇を対象に、多文化主義の視点から民族や性差に配慮しながら考察を加える。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際学部国際学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
領域 関連 科目	実践英語学特殊講義	1. 統語論、意味論、形態論、音韻論を対象とし、高度な学術研究に通じる現代英語学の諸問題に検討を加えるなかで、専門研究としての英語学研究への視点の設定や方法論を教示する。疑問文、命令文、感嘆文、否定文について新しい角度から問題点を指摘する。 2. 二言語習得と英語教育をテーマとする。第一言語習得に関する理論の応用よりも、現場におけるデータの重視により、第二言語/外国語の効果的な指導、習得・学習法を追求することに関心の中心を置く。年齢と第二言語習得の関係、バイリンガリズム、イマージョンプログラム、教室内第二言語習得、四技能の習得、形態・語彙・構文の習得、UGと第二言語習得、等について考察する。	
	イギリス文学特殊講義	1. イギリス文学を多角的に捉え、その多様な断面を明らかにし、さらに作品や作家に関わる特質や、作品と作家を取り巻く要素である文化、歴史、社会、また文学研究に関する特殊なアプローチを紹介するなかで、専門研究としてのイギリス文学研究への視点の設定や方法論を教示する。 2. 「初期近代イギリス文学論」ルネサンス期英国の詩と演劇を中心に、社会文化史的視点から初期近代イギリス文学の特質を論ずる。1980年代以降の新しい批評の動向に触れつつ、文化研究の手法によって光を当てられる初期近代イギリス文学の諸相を学ぶ。	
	アメリカ文学特殊講義	1. アメリカ文学を多角的に捉え、その多様な断面を明らかにし、さらに作品や作家に関わる特質や、作品と作家を取り巻く要素である文化、歴史、社会、また文学研究に関する特殊なアプローチを紹介するなかで、専門研究としてのアメリカ文学研究への視点の設定や方法論を教示する。 2. アメリカ文学を読み解く際に必要となる、いくつかの視点、キーワード、概念について基礎的な知識を提供し、それをを用いて実際のテキストを読み解くための方法論、技術等について、実例を示しながら講義を行う。アメリカ文学を解釈する上で不可欠となる、人種、ジェンダー、社会構造、禁酒法、移民、地域性、荒地、宗教性などの概念について、個々に説明を行っていき、実際のアメリカ文学からの引用例において、それらがどのように用いられ、あるいは変容させられているのかを確認する。	